ぶどうの木

第 7 号

目　次

巻頭言	榎本牧師	1
基督伝道隊教会総則及規定	榎本牧師	2
オルガンとわたし	伊規須泰子	5
彼は常に生きておられる	正野員子	8
妹のこと	秋山幸子	16
雑感	河本かつ	18
ノートの中から	正野真宏	20
選びと召し	小松南子	23
救のあかし	藤掛邦夫	26
我救い	所司恵正	29
母親失格	大田邦子	33
今は主のはたらかれる時です	内海富子	39
ぶどうの木雅歌 (II)	X . Y Z	40
玄海遊歩道	安部タマエ	46
文芸コーナー	正野真宏他	48
牧師館訪問記	取材班	50
随想二題	小羊生	53
絵による説教ノート	伊規須太郎	57
母の日に想う	恵まれた女	61
小さな発見	上野米子	62
媒酌	伊規須太郎	64
私の朝餉	上野米子	67
お隣の人	ルデヤ	68
編集後記		70

八幡前田教会
大濠公園教会

巻頭言

榎本利三郎

あなたがたが実を豊かに結び、そしてわたしの弟子となるならば、それによつて、わたしの父は栄光をお受けになるであろう。

（ヨハネ　15・8）

ぶどうの木もご覧頂いてわかります様に、今年は主の御めぐみに由つて、豊かな実が結ばれました。

種も無い、甘い、早生の小粒のデラがコハク色をしているかと思うと、キャンベルは甘い中にも酸味があり、ベリーAは底無しに甘く。巨峰は大きな果粒にタップリ甘い果肉を詰め、マスカットは新鮮なグリーンの色と高雅な味で、ぶどうの貴公子を思わせます。然し何れもぶどうの木にみのる実として共通の味や型をして居ります。

「ぶどうの木七号」に結ばれた果実（記事）もデラ・キャンベル・巨峰・ベリーA・マスカット等様々な果実ですが、何れも「我はぶどうの木」と仰言る主によつて結ばれた実であり、恩寵という共通の甘い味があります。その実は悔い改めの実、から始まり、感謝の実・さんびの実・愛の実・信仰の実・のぞみの実・聖霊の実……それぞれ甘い恩寵の味、酸味・苦味・辛味・渋味……等此の世のぶどうに無い味が加えられて居ります。此の実を食べた人には、酸味から主の聖前に悔い改めへと導かれるでしょう。苦味から救われる前の苦難にみちた生活を思い起し、今の甘いめぐみをひとしお深く感謝するでしょう。又辛味は今の私達に鋭い警告を与えるでしょう。

此の実を豊かに食べて、永遠の生命に与り、主のお言葉に従つて主の弟子と成りますならば、此のぶどうの木によつて（主イエス・キリストによつて）父なる神を崇め、神の栄光をほめたゝえる者と成らせて頂けます。

父なる神がめぐみをもつて、此のぶどうの木をいよいよ養い育てゝ、その幹に連なる小枝に、日々に新しい実を豊かに結ばせて下さるよう祈ります。

「基督伝道隊教会総則及規定」

榎本牧師

昭和十五年二月九日付で提出した基督伝道隊八幡教会設立願に添付した基督伝道隊教会総則及規定を掲載して、この教会の使命を明らかにする事ができるならばと思います。

また此の教会の在るべき姿勢を知り、各自が如何にして教会を通して、主に仕えるかを学び度いものと思います。

時局柄この設立願は理由無しに却下されて、無認可の八幡基督伝道館で発足し、後教団成立して、教団八幡長者町伝道所に変更し、主のめぐみに成長して八幡前田教会となり今日に至つております。

一、起　源

基督伝道隊は拓植不知人氏の神に選ばれて、救い即ち新生のみならず聖書的聖霊のバプテスマを受け、聖書的福音の宣伝を始め、魂の救いと神癒の栄光あらわれ、この純福音の法則によりて、指導を求むる者自然に増加し来りたる所より生れたるものなり。

二、総　則

我等は特殊の信仰箇条を有せず、聖書全部をそのまま信奉し、之を実験体得するを以て本旨とす。専ら宣伝せんとする所はキリストの十字架と復活及び聖霊の降臨これなり。その中に一切のものを包含するものなるを信ず。もとよりキリストの再臨とその結果は聖書全巻の帰結というべきも、地上にて実験する所は上記の二大恩寵なればなり。

三、方　法

方法としてはキリスト御自ら採り給いし所に服従するの他何等人為的・時代的の方法を用いず、主なる働の方法は左の如し。

(一) 福音宣伝
(二) 伝道者の養成
(三) 神　癒
(四) 日曜学校

四、礼　典

礼典はバプテスマと聖餐の二とす。

バプテスマは浸めを以つて通例とす。但し事情に由つては滴礼を許すことあるべし。

一度他教会にてバプテスマを受けたる者も、若し充分なる悔改めと明らかなる新生の経験なき者は再洗すべし（徒19・1～6）これは本人の希望によるものとす。

陪餐者は本隊のバプテスマを受けたるものたるべし。といえども救の証ありてバプテスマを受くる機会なきもの及び本隊の信仰に一致する他教会の信者は此の限りに非ず。

此の二礼典の司式者は本隊の牧師たるべし。格別なる事情ある時は男子たる伝道師はバプテスマに限り此を司ることを得べし。

結婚式・葬式は聖礼典にあらざるも之を尊重すべし。結婚式・葬式は牧師此を司るものとす。差支ある時は葬式に限り伝道師此を司ることを得。

五、講　壇

教会の講壇は牧師全責任を負い、牧師の許なくしては何人も講壇を用うること能わず。然れども聖書的聖霊の器はこの限りにあらず。

六、修　養　生

修養生は本教会に起臥して専ら修養する者を言う。その規定は別に定む。

七、職務上の区別

教役者の職務上より次の如く区別す。

(一) 牧　師

牧師は牧会する者の公の名称なり。資格は基督伝道隊活水学院及び日本伝道隊聖書学舎の課程を修了したる者とす。基督伝道隊牧師之が任免を行う。

(二) 伝　道　師

伝道師は本教会にて修養を修了したる男子及び基督伝道隊活水学院にて修養を受けたる男子を云う。

(三) 伝　道　婦

伝道婦は本教会に於て修養を終了したる女子及基督伝道隊活水学院にて修養を受けたる女子を云う。

八、会　員

会員は本教会のバプテスマを受けたるものたるべし。但し特に聖霊の満ちたる教会より転入したる者は此の限りにあらず。

会員にして信者たるに適しからざる行為ありたる時

又は信仰を全然失いたる者は除名すべし。然れども此はその魂を見限りたる意に非ず、信仰の恢復する時は喜びて受入れるものとす。除名の場合は愛を以つて当人に此の事を懇ろに告ぐべし。

九、財　政

本教会に於ては総て信仰に由りて一切の供給を神に仰ぐの他、何等の募金運動及び方法を取らず、「使徒達の足下に置けり、」との意味にて献ぐるものの他、人より金品を受けざるべし。教役者は一切俸給制度を設けず、此れ働の報酬を受くるは神の国の制度に非ざれば也。奉仕の特権に与る事は神の恩恵にして、福音に由りて生活せしめられる事は神の憐みによる。

十、事　務

信者の中より二名の会計と一名の書記を置き、その事務を司らしむ。牧師此を撰定し、無報酬とす。任期は定めず、その時の便宜に従う。

以　上

○わたしはあなたがたの神、主であるから、あなたがたはおのれを聖別し、聖なる者となならなければならない。わたしは聖なる者である。

レビ　十一ノ四四

○わたしは聖なる者であるからあなたがたは聖なる者とならなければならない。

レビ　十一ノ四五

○　愛する者たちよ、わたしたちは、このような約束を与えられているのだから、肉と霊とのいつさいの汚れから自分をきよめ、神をおそれて全く清くなろうではないか。

二コリント　七ノ一

オルガンとわたし

伊規須　泰子

◎歌が下手だ、調子はずれだ、と言われつゞけてきた小学生の頃でした。うたつていてもいつか調子が狂つてしまつていることに気がついて悲しい思いをした私でした。

家族の者からも言われ、自分でもそう思い込み、それでも歌を失うわけにはいかず苦労してきた私でした。

音楽の試験で、うたわせられることに劣等感さえ感じました。毎度成績表の音楽の所を見るのがつらかつたけれども、不思議に音楽の点数はそう悲観するほどではありませんでした。きつと筆記試験で救われていたのでしよう。

◎私の家にベビーオルガンがありました。その頃にしては割合めずらしい存在でした。音符が読めるようになつてから好んで弾きました。もちろんぽつつりぽつつり雨だれ式でしたが、口からでる音は誤つていても、オルガンは正しい音を出してくれる事に救いを見出したからだと思います。

◎こんなにがい想い出のある私が、今、教会のオルガンの御用をさせていただいている。なんとも不思議な話です。神様の業です。いちばん苦手なものを用いよとおつしやるのです。だから誇ろうたつてほこれません。いつも依り頼みます。弾けなくて当り前、弾けて、大きな大きな感謝です。考えてみれば皮肉な事をなさる神様ではありませんか。

◎オーガニストのテル子さんがお忙しい時、代りに弾きはじめたのが、教会のオルガンと私の縁のはじまりでした。もちろん最初はメロデイだけを追つかけ追つかけ弾くだけでした。これではどうにもならないとオルガンを習いはじめたのでしたつけ。西南女学院の佐々木先生を紹介していただいて、毎週教会や保育所にきていただいたものでした。たのしくそして時にはつらいこともありました。よく弾けて有頂天になり、まちがいだらけのしどろもどろで落胆してみたりでした。しかし集会でも次才に複音でひけるようになつてきました。

礼拝でオルガンをひきながら、ちらりちらり入口を見ていました。テル子さんがみえるとそそくさとさが

つては、かわつでもらいました。やがてそのテル子さんが東京の方に行かれ、私がいつも御用をさせていただくようになつたというわけです。

どの曲をうたうかわからないからびくびくでした。オルガンにかじりついて一生懸命でした。感情こめて、など言う段階ではありません。でも限りないお恵みでした。そして、だんだんオルガンとも親しくなつていきました。オルガンのほほ笑みが伝わつてくるようになつてきました。

◎ 下手は下手でも、オルガンの御用があるからとうぬぼれて、集会の始まる時間におくれないようはげみました。何か用をさせておかないと集会に近づけないような弱い私だつたのかもしれません。いいえ大きなお恵みだつたのです。

◎ オルガンの上手な方がいるな、と思うとあがつてしまつて手がふるえました。己がピンピンしていて恥ずかしかつたのです。堀り出されたる穴を忘れて上手だと思われたかつたのです。馬鹿な話です。

◎ 一番でつつかえたところを、二番でも三番でもつつかえる、ということもありました。あつ、又つつかえるぞ、と思うとその通りになります。これはこれでゆとりができた証拠かもしれません。

◎ 馴れてくると歌つている方の顔もみえはじめました。嬉しそうに歌つている顔が見えると私の心までずんでまいります。

又反面馴れるとは恐ろしいことで、ひきながらいつの間にか他の事が心に浮んでくるという事もありました。何番をひいているかわからなくなつて早くアーメンをひいたり、一節多くひいて冷汗を流したりしました。言語道断の話〝馴れあなどる〟ことはつつしむべきです。

◎ 私が恵まれているとオルガンがひとりでにはずみ、心が重たいとオルガンが冷たくそつぽを向いてしまうのです。心がそのままうつるようです。

◎ リズムができていない、といつも、しかられたものでした。いえいえ、今も叱られつづけているのです。「ゆつくり早くひけ」とむちやなことを言われます。よくひけるところは早くなるぞ！ 3/4、6/8拍子に気をつけろ！ などなど私の先生は本当にやかましいのです。まあ、でもよい勉強になります。誰なればこ

そ言つてくれるでしようか。

◎ ウエディングマーチも何回ひかせていただいたでしようか。何回ひいても未だにうまくなりません。我家での稽古では気持よくスムースにひけるのに、いざ本番となるとつつかえてしまうのです。実際なさけなくなります。でも許されて又ひかせていただくのです。信仰ぬきにしたら全く価値のない奏者です。ただ新家庭の為の祈りと精一杯のお祝の気持だけはもつています。これで歩きにくかつた所をゆるしていただけるでしようか。

◎ オルガンの練習は残念ながらあまりする時間がないのです。でも練習を積み重ねていると、或時ピタリと感情にふれることがあります。ああこれだなと思うのです。実に気持よく精一杯讃美できるのです。最高です。聖書を読んでいても、お祈りの時でもこんな場合があるでしよう。神様にピタリと心が定まり、奥義を悟るというか……。

◎ さてさて、もう何年オルガンとつき合つているでしようか。普通ならたいてい上手になつているはずですが、スネにキズ持つ私は今もつてどうしようもなく調子はずれです。

しかしです。下手である事を承知の上で用いて下さつているのです。感謝ではありませんか。胸を張つてよろこんでひかせていただきます。下手だ下手だと卑下しません。神様の責任ですもの。

歌う皆様にはちよつぴりお気の毒ですが、ひらにご容赦願います。

以　上

柘植先生の標語

〈生涯の標語〉

一、今よりわれは主なり……われ行はば誰かとどむることを得んや。（イザヤ四三ー一三）

二、我は全能の神なり、汝我が前に行みて完全かれよ。（創世記一七ー一）

三、事をおこなふエホバ事をなして之を成就るエホバ其名をエホバと名る者かく言ふ、汝我に呼求めよわれ汝に応へん。（エレミヤ三三ー二、三）

彼は常に生きておられる

正野員子

一、主の山に備えあり

「人の歩みは主によつて定められる
主はその行く道をよろこばれる」

このことを知つておりましたら、なにも人をうらんだり、悲しまなくてよかつたのですが、私等一家が、見ず知らずの土地、東郷町に、追われるようにして来た日から私たちの苦難の道が始まつたのでしたが、その荒野のような所に道を設けて下さり、砂漠のような所に立つ私の所に主は下つて来て下さいました。そしてそこで福音に接したのでした。苦しければ苦しい程主を求めることも烈しいものがありました。五人の子供等は必らず日曜学校に通わせ、礼拝で習つたさんび歌を用紙に写して子供に教え、家庭礼拝を毎日いたしました。さんび歌の本が買えなかつたからです。

信仰うすき私は子供等にイエス様のお話をしていても生ける主を知らず、人のいない所でハンナの祈りのように、泣いて生活難を訴えておりました。その中で三才のひろみちゃんを亡くしましたが、頼るものとてありませんので主のみ頼りとして行商しておりました或る時八幡のお得意様から、私に家を建てゝ下さり、お金も貸してやるから八幡に出ておいで、としきりにすゝめる人がありましたが、私ははじめ冗談だと思つていました。それでも何度もすゝめられるので、私は見ず知らずの人からそんな厚意を受けることはできないし、又失敗するようなことがあれば、借りたお金も返すことができないからと辞退したのですが、元材木屋さんをしておつたのなら何でもできないことはないと、しきりにすゝめられ、もし失敗したらお金は返さないでもよいとまでおつしやつたので考えてみることにしました。

信仰を導いて下さりよく訪問して下さる長老の吉田先生にこのことをご相談しましたところ、神様のみ旨かどうか祈つてみようとおつしやつて帰られたまゝ何日たつても返事がもらえませんでした。それから一週間たつた頃やつとおいでになつて、「八幡に行きなさい。神様のみちびきだから行きなさい」とおつしやいました。

先生のお言葉を信じ、力が与えられ、早速八幡に行き「よろしくお願いします」と言つたら、自分で家の設計をしなさいとおつしやつたので、早速主人と設計図を書いてその通り建てゝもらいました。

家ができあがつて移転したのが卅四年五月でした。悲しかつた時よく鐘崎の海岸で祈りました。小さくても独立した店を与えて下さいと祈つた祈りが、こんな形でこんなに早く聞かれようとは夢にも思いませんでした。

まことに主は生きておられると思いました。

くしきみわざはそれから次々と起りました。資本金を借らねばなりませんので、現金商売のうどん屋を初めることにきめますと、糸山さんという方が、食堂をやめ、ビルを建てる為食堂の道具の始末に困つていられるとのことで、たゞで什器一式下さいました。それだけでなく卅年前使つていた女中さんと町で偶然出会いましたら、現在食堂に三年も勤めておられて御恩返しに私が覚えるまで来てあげるとおつしやつて、指導して下さり、看板は当分頼まれないのでのれんだけを出していました。すると或る日、材木屋時代よく来られていたイワサキ看板店のご主人に何十年振りに会いました。その方が、私に表の看板を書かして下さいとおつしやつたので書いて頂きたいのですが、お金の都合が悪いから又先で…と言いますと、お金はいらないとおつしやるので驚いてお尋ねしますと、私の父に恩になつているそうでご恩返しのつもりで書くのだからお金は頂きませんとおつしやつて、螢光入りの看板や横書と縦書の看板を何枚も書いて下さいました。夜は三平うどんと書いた字が螢光灯で赤く光つて、遠くからでもよく見えました。代金を支払えば何万円か出さねばならない看板をたゞで書いて下さつたのでした。こうして「主の山に備えあり」まことに至れり尽せり、主のお膳立は整つておりました。お蔭で殆ど資本金も借らずにすみました。

二、天国ソロバン

開店のすべり出しも、まあまあといつた所でしたが、教会を探すまでは落ちつきません。あちらこちらの教会をめぐり歩いて、心にきめたのが前田教会でした。（このことについて書くことが沢山ありますが別に書

くことにします。自分が決めたのでなく、全く主のみちびきでありました。）

初めて説教をきいた日に、こゝだと決めて牧師に初めて会つてご挨拶しますと、初対面から叱るような語調で「キリスト者が時々来ますとは一体どういうことですか」とおつしやつたので、私が家賃が払えないからと言えば「家賃を払いたいなら毎週来なさい」とおつしやる。

運賃もいれば献金もいる。そしてその日は売上零、それを毎週来なさいと一寸厚かましい過ぎるではないかといいたい所、それを知つてか知らずしてか、聞いているのは私一人なのに一時間以上も説教なさいました。旧約聖書を開いて、安息日を清くすべしとか、私は聖書一かんで卅年従つて来ました。私が生きていることは、主が生きている証拠だとおつしやつても、私にはさつぱりわけがわかりません。理くつにあわないことばかりで納得ゆきませんが、そのお言葉の熱烈さの中に何かゞあるような気がして、「よしそうまでおつしやるならやつてみよう」という気になりました。

帰つて主人に話すと大反対、家賃がたまつているのに、家主がどなつて来るぞ、とおどします。「日曜は休みます」と店頭に貼り紙を出すと、いつのまにか主人が引破つていました。又書いて出すと又破りました。

それでも毎週日曜日は戸を閉めて礼拝に行きました。案のじょう家主が来ました。私に出なさいと言つて主人は二階にかけ上りました。「あんたがた日曜のかき入れ時に毎週戸が閉つているが、病気でもあるまいが一体何している。家賃払えるやろ家賃もらおうか」ごもつともな家主の言い分、それに対して何と言おうか、言う言葉もない。ここで私は度胸をすえて言いました。「家主さん、あなたはご承知ないかも知りませんが私等はクリスチャンです。私たちは日曜毎礼拝に行つています。それは家賃を払いたいばかりに教会に行つて神様の祝福をお祈りしています。お蔭様で売上も、祝福されつゝありますから、今しばらくの間目をつぶつて見ていて下さい。きつと支払いますから」そして資本金はこのように主からいたゞきましたので借らずにすんだのですと、その事情を、私は真実をもつて愛想をつくしてお話したので、通じたのでしょう。だまつて帰られ、以来それから一度も請求受けること

はありませんでした。主は決して恥かしめ給いません
でした。
こんな事がありました。ナッパ服を着たゴマ塩頭の
年輩の作業員らしい、やせた、毎日すうどんだけ注文
なさる方がおられました。或る日可哀そうに思つて、
すうどんの中にポンと卵一つ割つて入れてあげ、これ
はおまけですと言つて差し出しました。栄養がなくて
は力も出まいと思つたからでした。
その方は食べ終ると私の所に近寄つてきて内ポケッ
トから一枚の名刺を差出し、私はこういう者です、と
おつしやつたので手に取つて見ると、〇〇会社工場長
の肩書を持つた方でしたので飛び上る程驚き、失礼を
おわびすると「いやいやここのうどんはまことにおい
しい、これから、うちの工場の指定食堂にしましよう」
とおつしやつて下さいました。それからはお昼時は満
員でした。悲鳴をあげる程の忙しさでした。一日も休
まず働いた時より聖書のみことばに従つて毎週礼拝を
捧げた月の方が、ずつと売上は多くなつていました。
ソロバンの上に乗らない、神の祝福は、マイナスをプ
ラスに変えることができ、計算することのできないも
のがあることを知り、先生のおつしやる意味がやつと
わかりました。

三、実現なさる神

お店の繁昌につれ、朝早くから夜おそくまで休むい
とまもありませんでした。遂に無理が重なつて倒れて
しまいました。その倒れた所が煮たつた釜の上で、沸
り湯を下半身にかぶり大やけどをしました。その為一
年三ヶ月床につきました。長女を勤めをやめさせて、
代つて働いてもらいました。
私はその患難の中で、主から教えを受けたのでした。
聖書に書いてある通り主の十字架は私の耐え得られな
い程の痛みも重荷も取り去つて下さいました。そして
聖書から宝を見出したりして慰められておりました。
沢山な方々の御見舞を受けた事でしたが、中でも忘
れられないのは、東郷の教会の方々が数名見舞に来ら
れました。その中でS姉は、私のうわさを耳にして来
られた方でした。八幡済生会病院で診断の結果胃潰よ
うとのこと、すでに穴があいて危い、早速手術をせね
ばならないということでしたが金は無し、そのなやみ

は大変なものでした。私は大変気の毒に思つて祈るような気持の時にイザヤ三〇章十五節以下のみことばを示され、説教をして、主は生きていらつしやる、あなたの病気は手術しなくても治りますと断言致しました。そして祈つてあげ、信仰持つのですよ、祈るのですよ。と教えてあげました。それから度々いらつしやる度毎力づけてあげましたら、一ヶ月も経つた頃、菓子箱ご持参でお礼に来られました。全く神ゆで治りました。今レントゲンを取つてもらつたら、新しい肉で穴もふさがつており医者も頭をかしげて不思議がつていたそうです。大変な喜びようでその後近隣の人を導いて家庭集会を初めていますという嬉しい便りをいたゞきました。この驚くべき主の栄光を見て、これが私の使命ではあるまいかと考えるようになりました。私もそうあれかしと願うようになりました。「天のお父さまもし私にこの使命を与えて下さいますならば、出来るように道を開いて下さい」と祈りました。そうしますと「あなたがたのうちに良き願いを起させこれを実現されるのは神である」とのみことばをいたゞいたのです。その祈りはきかれ、思う所願う所にいたく勝つた事をなさり道はとんとん調子で開けて、誰の世話にもならず働かずとも生活できるようにして下さいました。そこでかねてから、ルデヤのように、家庭集会が祝されてピリピの教会ができたのだと牧師から聞いた時から、そういう希望を持つておりましたので、教会のない所、福音のない所を選んだのが海老津でした。ですから八幡の教会に通うのは非常に不便でもありましたが、通いつけるとなんでもありませんでした。

空気のすんだ所にもつたいない程の土地を手に入れ家を建て、看板をかゝげて福音の家として発足致しました。まだまだ小さな集りではありますが主の手ほどの雲を見させていたゞき励んでおります。みことばどおり主のお約束に間違いなく、今後もどのように実現して下さるでしようか……。私共は目の前に置かれたひと足ひと足お従いする道しかわかりません。

四、蔭の祈りの人々

先日福岡東病院入院中の吉田先生ご夫妻を見舞に参りました。

随分ご無沙汰してしまつて、暫らく見ない内に奥様

の髪も大分白髪がふえて見えましたが、お顔は信仰の輝きが増し加えられ、若々しく素顔の美しさに少からず驚きました。先生は今年八十二才になられた由、白いあごひげは見事なもので胸まで垂らして仙人のようでした。以前は先生々々と実父のように慕い近親感を持つていましたが、一寸近寄り難い感じがして、お話しの相手は奥様でした。それでも先生に聞いて戴きたいので、つとめて声を大きくして語りました。集まりに来られる家庭集会の人たちのことや、祝された家族のこと等を写真持参で報告致しました。これもひとえに牧師先生をはじめ多くの望徒方の蔭のお祈りがあつたればこそでした。

吉田先生も私の報告に一生懸命耳を傾けて聞いていらつしやいましたが、余り長くなつてはご迷惑と帰りかけようとすると、びつくりするような大きな声で臥したまゝの姿勢で、私の為に長いお祈りをして下さいました。あとで奥様が小さな声で、先生があなたのことを毎日祈つておられるとおつしやつたのをきいて、何の恩返しもしない私のために祈つて下さる御愛を心から有難く思いました。この様に陰で多くの方から祈られておりました。奥様は三階から下の玄関までお見送り下さりそこで暫らく立話を致しました。その時こんなお話しをなさいました。

先生は四年前の四三年五月胃がん手術の為に入院されたのだそうです。私は初めて聞かされたのでした。その日親せきの人等が遠方からかけつけて来ましたがその日に限つて風邪熱で手術ができなくなつたそうです。七十八才の高令故手術をしても結果がどうなるかわからないので、もう寿命とあきらめようということになつて、手術はしない事に決めたのだそうです。これも神様のお助けで手術しなくてよかつたのですよ、とおつしやいました。医者は長くはないと言われていたそうです。今もガンはあるのに、ちつとも活動も転移もなくますます好調で天気の日は散歩に出られる程になられ、医者も奇跡とおつしやつていられるそうです。主の許しなくば、ガンの菌も手も足も出ないことを知りました。それは先生の信仰をよみなされた神の御報酬だと私は信じて嬉しく思いました。先生が一日でも長生きなさつて祈つて下さるよう願わずにはいられませんでした。

先生はもう字をお書きにならないと奥様から聞いておりましたのに礼状を下さいました。そしてそれにみことばが添えてありました。

「あなたがたの救われたのは実に恵みにより信仰によるのである。それはあなたがた自身から出たものではなく神の賜物である」

と書いてありました。

アーメン

五、今は主の働かれる時です

「もし人が卑しいものを取去つて自分をきよめるなら彼は尊いきよめられた器となつて主人に役立つ者となる」

六月二日大濠教会聖会中に示されたみことばでした。何何とかしてきよめに預つて、真の主の僕となりたいと願つて日々血潮を仰ぎ祈りました。或る時テモテ書を読んでおりましたら、

「神の造られたものは皆よいものであつて感謝して受けるなら何ひとつ捨てるべきものはない。それらは神の言と祈りとによつてきよめられるからである。」

私のうちに好き嫌いがあつてはいけないことを示されました。それで一つ一つ悔改めましたら、嫌いなものはすつかりなくなつてしまいました。私は庭の草取りが嫌いで苦になつて、広い庭がうらめしくさえ思つていましたが、今は感謝で、さんびかを歌いつつ雑草を一本一本我が卑しい心を抜き取つているようで、取つた跡のすがすがしさを楽しみ、バラの花やくちなしの花のえもいえぬ香り、なすやきうり、トマトの手入れ、今朝つやつや紫色に光るなすをちぎり、神様は手入れをしたゞけ見事な果実を報酬として、必らず下さる喜びを味わいました。やがて実るであろう柿やみかんの虫も愛情をもつて取つてやりました。色とりどりの花に蝶々が蜜を集めてひらひら舞つており、造主なる神の造形の妙をほめたたえずにはいられませんでした。何でも感謝できるようになりました。

息子のことでいろいろの事があつて、その問題がいつまでも解決せず、ほとほと困つておりましたところアブラハムの信仰を教えられ、ひとり子イサクを祭だんに捧げるようにして、神様に一切をおゆだね致し、見守つておりました。そうしましたら主が働いて下さ

つて、その問題を食いものとなして下さり却つてその問題によつて、息子が神に一層近づくようになり、祈り深くなつたのですから、変りました。埋めようもなかつた母子の断絶も、息子の方から近づいて来るようになり互いに信仰によつてつながり一致され、共に神を崇めるようになりました。私は人に裏切られて人生のどん底に落ちましたがあなたのみ手はその所で私を導きあなたの右のみ手は私を支えられました。逆境も禍も皆神の超自然の力を以て転じて福となして下さいました。それだけではありません。先ず長男が救われました「子よ安かれ汝の罪許されたり」と。続いて長女が悔改めに導びかれました。「汝の罪緋の如くなるも雪の如く白くなさん」罪許され新しい人になして下さいました。主人や二男三男も日々神のみことばに導かれて歩む者とされました。それから最初の者が一番後になつた私にも「我れ万物を新たにせん。我れ言いけるはすでに成れり」とのみことばをいたゞきました。

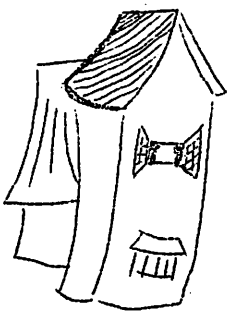
当然亡ぶべき者であり不信仰者が、御血により潔き者、神の子となつたのです。

これこそ奇跡でなくて何でありましよう。死人を甦えらせ、無から有をよび出す神の超自然の力であり神の摂理の御恩寵でありました。如何なればかくも人の子をかえり見給うや「神を愛する者み旨によつて召されたる者の為には凡てのこと相働きて益となるを知る」のであります。

私の部屋の寝室に古ぼけて紙も黄色に変色した一間もある横額がかけてあります。

「天於宝積」と書いてあります。これからの残る生涯は「天に宝を積む」口で言う程なまやさしいことではないと思うけれども、日々自分を潔めて、天国を目指して歩んで行きたいと願つております。

おわり



妹のこと

秋山幸子

青年の頃、大阪の教会で「市川さん（私の旧性）今度お証して下さいませんか」と牧師先生や役員の方から、お声がかゝりましたが、教会にはいつも行つておりながら何をお証したらよいのか、（題材といいますと語弊があるかもしれませんが）話題もなくお断りしていました。お恥ずかしいのですが洗礼を受けて十五年余りたつた今になつて、今迄いろいろな事に出会いその度に主のお守りを受け、助けられ救われた事をお証したいと思うようになりました。まだまだ未熟ですが、やつと自分にも信仰の目が開きかけたように思つています。勇気をふるつてペンを執りました。

いつかの先生のお説教に、マルコによる福音書十一章二二、二三節「神を信じなさい。よくきいておくがよい。だれでもこの山に動き出して海の中にはいれと言い、そのいつたことは必らず成ると、心に疑わないで信じるなら、そのとおりに成るであろう。」がありましたが、神様が、ある事を通して私にその聖言を成就して下さいました。

それは妹の事です。妹は先天性の心臓病（弁と弁の間に極小さな穴があいていて、そこから血液がもれている。）で高校二年の時、阪大病院で二週間の精密検査を受けた結果は手術をした方がよいという意見の先生と、しなくてもよいという意見の先生が半々で、話し合いの結果しなくてもよいとの事でした。もう結婚もできない。赤ちゃんも産めないだろう。一生独身でいようと決意していた様でしたが、その後驚く程に元気になり、短大（身分不相応でしたが、何かを身につけるべく）を卒業、千里山の教会附属の幼稚園に五年間無欠席で勤めました。その間家庭教師をしたりオルガンやピアノを教えるアルバイト又コーラスグループに入り、青年会。教会学校の奉仕と随分活躍していたようです。又ご縁があり、結婚もし、赤ちゃんも（今年二才）与えられました。前置が長くなりましたが、その赤ちゃんができる迄に流産しかけたり、足をベランダに置いてある灯油の缶でケガをし、十二針も縫つて入院したりでしたが、一応無事出産しました。でもどういうわけか赤ちゃんには、ずい膜炎という恐い病

気の菌が体内にあり（産まれる前から病院ではわかつていたそうですが）妹は知らず「自分はどうなつてもいいから（心臓病で難産を覚悟していた）赤ちゃんだけは無事産ませて下さい。」という気持でした。

出産後二カ月も赤ちゃんだけ入院、妹夫婦は許された日時に面会に行くだけでしたが、その面会時の様子を細かく知らせてくれましたが、涙と共に読み祈りました。

産後の一番安静が必要な時に三晩泣き続け、手伝いに行つた母も慰めようもなく、気が狂つてしまわないかと案じていたそうです。

ずい膜炎というのは脳性小児マヒの様になるか、頭の大きい子供になるかと言われているそうです。

お医者さんも出来るなら生きていない方がよいと思われ、ミルクも与えず、ほ育器の中で見捨てられた状態だつたそうですが、余りにも生命力が強いので（善処して下さり）最善を尽して下さり、丁度薬が体に合つて快復に向いはじめ、しばらくして退院のお許しが出るほどになりました。

退院後も一週間毎から二週間毎の通院となり、必死で育児に励んでいました。今では赤ちゃんも丸々太つてあまり病気もせず、とつても元気です。

私は四国にいる母からその話を聞いた時、なぜか不思議に神様が必ず奇跡を起して下さると思われ信じて毎日毎日祈り続けておりました。

妹は結婚後教会を離れていますが、本人も祈つた事と思います。勿論、大阪の両親や岐阜の姉も夜ごと祈つたでしょう。半年位してから病院の先生から「病気の方の心配はしなくてもいいから、普通の子供の様に育てなさい」と言われたとの便りを受けとつたときは言葉で言いつくしがたい感謝の気持でいつぱいでした。

祈りが聞かれた、神様が生きて働いて下さつている事を示して下さいました。

妹は日常生活の細々とした事でも両親に言えない事でも私に手紙で言つてくれます。私の手紙には必ず教会の事を書いております。

九州には親戚もなく、知人もないので、教会しか行く所が無く自然にそうなつてしまつたのです。妹も東京で同じ様な状態ですし、色々取り越し苦労をしている様ですし、近くの教会に行けばいいのにと思つてい

きした。先便で最近毎夜寝る時にお祈りしているとのこと。試練に会つた愛（めぐみ）ちやんもお祈りを覚え「かみた（さ）ま、きようもいちい（に）ちありな（が）とう。おとうちやんも、おかあちやんも、めぐみたんも、おまもりくだちやい。アーメン」とお祈りするそうです。

又、妹も近くの教会に行こうかしらとの文面に、本当に嬉しく思いました。神様がいつも心にかけて下さり、適当な時に妹を教会に導いて下さる事を信じています。神様のして下さつた偉大な業を忘れず、謙虚な気持で教会へ行き、信仰生活を歩んでくれる事を願つています。と同時に、私も今まで色々な面で恵まれ試みられ、それを克服させて頂き、今日迄お守り頂いています事を心に留め、深く、素直な心になつて、謙虚に日々を過すべく心を新たにしています。

皆様、どうかお祈り下さい。

「雑感」

河本かつ

詩篇　六六篇八～一二節

もろもろの民よ、われらの神をほめよ。
神をほめたたえる声を聞えさせよ。
神はわれらを生きながらえさせ、
われらの足のすべるのをゆるされない。
神よ、あなたはわれらを試み、
しろがねを練るように、われらを練られた。
あなたはわれらを網にひきいれ、
われらの腰に重き荷を置き、
人々にわれらの頭の上を乗り越えさせられた。
われらは火の中、水の中を通つた。
しかしあなたはわれらを広い所に導き出された。

イザヤ書　四六章三。四節

ヤコブの家よ、
イスラエルの家の残つたすべての者よ、
生れ出た時から、わたしに負われ、

胎を出た時から、わたしに持ち運ばれた者よ、
わたしに聞け。
わたしはあなたがたの年老いるまで変らず、
白髪となるまで、あなたがたを持ち運ぶ。
わたしは造つたゆえ、心ず負い、
持ち運び、かつ救う。

七十六才の今日まで、神様は私のような失敗だらけで神様の御胸をたびたびおいためる致す者にも、いつも変らないあわれみのお顔を向け、「汝の願いは何なるや」と私共の祈りを聞いて御言によつて導き力をつけ、助け励まして下さいましたので、きつと残る生涯も守り助けて下さると信じ、感謝しております。

靈感賦　九七章二、三節

ほむべき主エスよ、われは永遠に、
あがなわれたれば、よろこびみつ。
なやみのうちにも、主を見あげて、
すすむわが身は、よろこびみつ。

うき世のたびぢも、いましばしぞ、
やがて主来まさば、天国にいらん。

☆☆　柘植先生書簡集抜粋　☆☆

大正十五年五月六日

熱海　柘植不二人

D・K　様

お手紙によれば奥様には神の大いなる憐みと超自然の御力によつて支えられて居るとの事、先日も申し上げておいた通り人間の力が尽き果てた時に神の超自然の力は働きますから、一度与えられた聖言を離さずどこまでもこれを握り促え信仰を続けて頂きたい、聖言はこちらで勝手に取り替える事はせず、はじめに与えられた聖言をどこまでも信じ貫く方がよろしいのです。要するに石を除く事です。。。。。。

「ノートの中から」

正野真宏

ー失敗談ー

今朝目がさめるなり、お腹がキリキリと痛んだ。とうとうやつたな！久しぶりの病気を味わう。どうして腹をこわしたのか、その原因はすぐにピンと来た。それは昨晩、大変に暑く喉が渇いたので、冷えたヨーグルトを飲んで寝たのだが、ちようど半分ぐらいまで飲んだ時、もうそれぐらいでよしてはどうかという声が心の中に聞えた。けれども私はあとわずかだし、こんなうまいものをと思つて一気に飲んだのだ。

多分その時、神様が注意してくださつたのだろうと思う。私はその声を無視してとうとうゲーリークーパーになつてしまつた。あゝあの時、御声に聞き従つていたら、今までどおり食事をおいしくいただけたのにと、今になつて悔いる私である。

（三八・五・二一）

○ 私は夜八時半から聖書を読み、神との語らいを楽しんでいた。

ところが、九時になると面白いテレビがあるので、そちらへ行き、十時になつてもう一度机の前に座つたが、以前の神の臨在を再び感ずることができなくなつてしまつた。

そこで、思い出した言葉「子供がアイスクリームやソーダ水でおなかをいつぱいにしたあと、食事をすゝめられても食べるでしようか」（イソベル・クーン）

（四一・九・一五）

○ 友「今、名劇でやつている映画を見たかい。ぜひ見てごらんよ、絶対面白いから」。

さゝやき「そうだ君、ひとつ見に行きなさい。君はもう永い間映画を見ていない、たまには気楽になつて楽しみなさいよ。」

弱きクリスチヤン「うん、たまにはいいよね、でも明日が日曜日で日曜学校の準備があるから、。。。。。」

さゝやき「日曜学校の準備は夜したらよろしい。

君は最近話しがうまくなつた、ある程度即席でも話せるじやないか。

夜準備すれば十分間に合うよ。」

弱きクリスチャン「それもそうだね。」

ほそき声あり「まず神の国と神の義とを求めよ。」

さゝやき「クリスチャンと言えども楽しんで悪いことはない。クリスチャンは自由であるはずだ。」

ほそき声「確かに自由である。また楽しむことは決して罪ではない。私は行つてはいけないと言つているのではない。

君の私に対する態度を伺うているのである。

土曜日は礼拝の前日で心の準備をする大切な日である。

この世のもので心を汚し、神を愛する純潔さを失つてはいけない。それは君にとつて不幸である。」

さゝやき「映画を見たくらいでそう恐れることはない。神は愛である。

少しくらいの懲罰は許してくださる。さあ行きな。土曜日の午後ずうーと聖書を読む訳でもなかろう。しかもこの映画は悪い映画ではない。」

さゝやき声「この世の作つたものはすべて神に敵するものだ。」

弱きクリスチャンはしばらく迷つていたが、遂に友人と映画に行つた。見ている内は楽しんでいた。

映画館を出た時は早や陽は西に沈もうとしていた。

彼は映画を見て何か残つたかと考えたが、結局は時間の浪費であつた。その上、彼は先程からズキンズキンと頭が痛むのに気付いた。久しぶりの映画に目が疲れたのだろう。どうきの度に眼の奥が締めつけられるように痛むのである。家に帰つても痛みは続いた。

その夜は、母から話しかけられても、彼が答えないので母は不気嫌になつた。

彼は明日の日曜学校の準備をしなければと思い、机に座つて聖書を開いたが、心が静まらない。彼は神と交われない悲しみを味つた。

そして、自分の願いを押し進めようとしてロバに止

められたバラクのことを思い起こした。そこで彼は悔い改めた。

（四一。九。一五）

1. 幼な子

―生活の中から―

幼な子、なんと正直で素直なのだろう。
欲しいものがあれば欲しいと泣く。
淋しければ淋しいとうつたえる。
我れらも神の前にかくありたいものだ。

謙一が歩きはじめた。
飯台から私の所までとびついてくる。
しかし彼は自分を支えてくれる飯台を手ばなし、
私めあてにやつてくる。
幼な子は偉大な冒険者だ。
彼は間もなく歩けるようになるだろう。
我らもかくありたいものだ。

（四四。五。一七）

2. 金魚

金魚が鉢から飛び出して死んだ。
なぜ飛び出したのかわからない。
折角水も替えてやり、エサもやつたのに。。。。。。
その時声あり、
金魚は水の中が安全なり。
水の外にとび出すは、死を意味するなり。
わが子よ、わが愛の内におれ。
わが内よりとび出すは、枯れる外ぞなき。

（四五。七。四）

3. 信仰

庭の柿が色づいた。
謙一が食べたいという。
シブ柿だから熟するまで待てと言いきかせても、
どうしても取つてくれと泣き出す。
仕方なく一つ取つてやつた。
彼は口に入れたとたんにペッと吐き出して泣てた。
もうしばらく待てば、おいしく食べられたのに、
バカな話した。

（四六。一〇。三）

4. 非を認めない心

ミやんが私の前で音なしのオナラをした。
私は言つた「オナラしたの、ミやんでしよ。」
ミやんは言う「いゝやケンちやんがした。」
すると、ケンちやんが反撃した「ケンちやんじやない！」
私はもう一度「ミやんでしよ。」と問う。
すると、ミやんは「ネコ、ネコよ。」と真剣な顔で無駄な抵抗をする。
我らも神様の前にかくのごときで妨なかろうか。
罪人なのに、罪なしという。

（四七・四・二四）

5.

身分の自覚

二才のミやんが兄貴のマネをして、立ちションベンをした。
自分が女であることの自覚がまだない。
我らも神の子としての身分の自覚がないと世の人のマネをしてケツタイな格好をやり、神様の失笑を受けるにちがいない。

（四七・五・一三）

「遠ひと召し」

小松南子

「あなたに遠ばれ、あなたに近づけられて、あなたの大庭に住む人はさいわいである。」

「見よ、我れ万物を新にせん。」

此の素晴らしい聖言を頂いて、早や六ケ月、毎日此の聖言葉によつて励まされ、希望を持つて過して参りました。

主のめぐみに依つて、いつも来客や旅行で過した新年を、今年は幸に教会へ出席する事が出来、此の聖言葉を頂いて「神の全能の御力と大いなる御愛」にふれた時、目の覚める思いでございました。

そして、何とかエス様に従つて行き度いと決意を新しくして頂き、祈れば神様には出来ない事は無いという確信を持たして頂きました。

まず、日曜礼拝を守り度いと願つて、歩み出しました。今、此の六ケ月をふり返つて見ます時、神様はほんとうに聖言葉どおり依り頼む者に道を拓いて、恵を

与えて下さいました。たゞ感謝して居ります。
私の様な小さい者のために陰に在つて祈つて下さつた皆様に感謝申し上げると共に、そのしるしとして、二。三の走り書を写して、おあかしにしたいと願つて居ります。たゞたゞ感謝申し上げます。

〜 0 〜

一月九日（日）

土曜日、昼食の後、瑞枝が急に吐き気があり、顔色青く自家中毒の症状にて心配。子供の事、明日の礼拝の事、たゞ祈る。先生にも祈つていたゞき度く、思いきつて電話する。先生はお留守、しかし出席出来る事を信じ、たゞ祈る。
瑞枝も二時間位眠つ後、少し顔色も良く、元気を取りもどす。朝おかゆを食べさせ、八時四十分の電車で八幡へ出かける。たゞたゞ感謝。

〜 0 〜

一月十六日（日）

主人や祥子に魚釣に誘われる。然し教会に出席しなければいけない事をはつきり話す。主人も仕方なく許してくれる。雨がひどく降るので、車で釣に小倉まで行けば、教会に行くのにも良いだろうと、便乗する事が出来、寒い風に吹かれる事もなく、電車に乗りおくれない様にと走ることも無く、前田まで来る事が出来た。雨があまりひどいので、主人に、魚釣を止めて教会に出席する事をすすめる。
然し、今のところ主が未だ主人の心を閉ざされている様だ。然し、きつと全家族で教会に出席する時のくる事を信じ願う。
今日も瑞枝と共に礼拝に出る事が出来、心から感謝。

〜 0 〜

一月二十三日（日）

今日は朝から素晴しい天気、主人は昨夜から子供達と「地の島」に行くとはりきつている。
瑞枝は教会にも、釣にも行きたく迷つている。
主人の「初めて行く地の島だから、今日は釣に行きなさい。」とのすゝめで、日曜学校はお休みにする。
主人は、私は誘わない、もうあきらめたらしい、この前はつきり言つた事が恵みでなつたと、感謝する。

〜　0　〜

一月三十日（日）

今日も主の恵みで教会に出席する事が出来た。

昨日主人の疲れた顔と風邪の様で流感ではないかと心配、明日は主人の着替で八幡には行けないのではないかと思う。しかし、たゞ祈る。

不思議に、朝主人の「風邪が良くなつたので釣に行く。」との言葉にたゞ驚く。私は今日は教会に行くのは止めますから、貴方も一日ゆつくりして下さいと頼む。「大丈夫、門司にゆくからお前も八幡まで乗つて行け。」との言葉に嬉しいやら、心配やら、あわてゝ外出の用意。

車の中で、主人に「神様は恵み深く貴方の病気をいやして、私を教会に近づけて下さつたのよ。」と話す。

主人はたゞにが笑い。たゞ感謝、教会へ行く事をあんなに反対していた主人の変りように驚く他はない。

〜　0　〜

二月六日（日）

昨夜主人の帰りが遅くなり、休むのが一時過ぎになつてしまつた。朝早く起るのもつらい、主人の寝ているのを起して外出するのも申し訳ない、サタンがいろいろ心まよわす。然し、サタンに負けていけない。

神の武具で身をかため、聖言葉に支えられて歩まなければいけない。

瑞枝も日曜日ぐらいゆつくり眠つていたいだろう。

七時半、目をこすりこすり起て食事をする。今日は子供達だけ先に電車に乗せる。主人の食事の用意をしながら子供達の道中の安全を祈る。

私もあわてゝ家を飛び出す。一台乗り遅れたら、もう八幡へは行けない。電車に間に合います様にと祈りながら、一目散に走る。電車に乗つてからは、此れ等のすべての戦に勝つて、神の聖前に近づける喜びと、「今日も行くのか。」と床の中で言つた主人の事を真剣に祈る事が出来る喜び、心から感謝。

〜　0　〜

二月十三日（日）

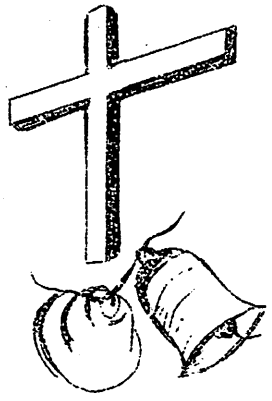
瑞枝にミュンヘンの音楽会に伴れて行つてやり度いと十二月に前売券を買つていたのが、丁度日曜日、あ

の当時どうして日曜日に用事をつくつていたのかと、ほんとに恥かしく、神様に申し訳なく唯愚かな自分を恥る。教会に行くべきか、音楽会に行くべきか、高い切符、どうぞ神様お許し下さい。

今日は教会に出席する事は出来ません。でも、主よ私と共に在つて下さい。心弱る事なく、私を支えてくださいと祈る。

音楽会はたしかに素晴らしかつた。然し、教会に行つた喜びを感じることは出来なかつた。

おわり



「救のあかし」

藤掛邦夫

「そのとががゆるされ、その罪がおおい消される者はさいわいがある。」（詩三二篇一節）

「彼を接その名を信ぜし者には権を賜ひて此れを神の子となせり。」元訳（ヨハネ伝一章一二節）

身にせられました私の御証をさせていたゞきます。

私の父は明治二十三年に受洗し、以来日本キリスト教会に属して、信仰をつゞけて居りました。

余り公的な仕事に私財を費し、私が小学校を卒業する頃は、相当な借財を負つていました。

そのために、近所の方々、親戚などで、立てゝ下さつた講会の集金に、毎月私は行くことになつていました。それがいやで、つらくて、どうして自分はこんな事をしなければならないのかと思いました。

そのころ、父が町から中央線の多治見駅迄、乗合自動車をはじめるため、京都の友人をたよつて、購入に

行きました。その時、私の奉公先をきめて帰つて参りました。

先に書きましたように、家に居ることを辛く思つて居りましたので、父の言にしたがつて、小学校を卒業しますと、一週間だけ父母のもとに居て、父に連れられて、豫て約束された、京都の表具師に弟子入をすべく、国を出ました。

父の友人に付添われて、約束の表具師に弟子入りを致しました。父が国を出るとき渡してくれました一冊の新約聖書を持つて、三年間子守をしながら、二二名の家族と同居の中にひたすら精進し、十年の年期に向つて進みました。

十八才の時、年上の女中さんと関係を持つようになり、その事が罪を知る動機となりました。

聖書に、罪はキリストのあがないによつて赦されると書いてあります。何とかして此の不倫からのがれ度いと、室町教会に店休日や夜の集会に通う様になりました。何か良い事をしたら、いわゆる善根功徳を重ねたらと、土足で上る教会の掃除など、店の休日に励んで居りましたが、一方その女中さんとの関係は深入するばかり、ますます苦しんで居りました。

二年位たつたと思います。その人はお嫁に行きましたので、一応関係は絶えましたものゝ、その行いに対して心にせめを感じ、教会にしげく通うようになりました。

その頃、室町教会の長老であつた川村兄の御宅に出入し、実状を訴えていくらか慰めを得、又、山谷先生のコリント前後書の講義などに出席して、いくらか自己の慰めを得て居りましたが、罪の赦しの確信が無いために、一方では教会に出入すると共に誘惑に打勝つことの出来ない毎日を送つて、自分の罪のために、ゆるしを求めてさまよいあるく月日を重ねておりました。

大正十三年二月川村兄の御宅で横浜兄に会い、八月に拓植先生が来られて、佐伯病院の空地で天幕伝道が開かれることを聞きました。同兄のお話しでは、先生によつて罪がしめされ、悔改めて救われる人々が群をなして居ることなど聞かされ、もうどうしようもない罪のために夜通しさまよつて苦しんで居つた私は、その日の来るのを一日千秋の思いで待ちました。

八月十五日、天幕伝道が開始され、夜の集会に川村

兄と連れ立つて出席致しました。あのそつ歯のチョビヒゲを生やした拓植先生が、太鼓タンバリンでどんちやんしたあと、講壇に立つて人生四大問題の解決を御話しする。先ず今晩は生活の問題からと、神の国とその正しきを求めよ、と語られました。

私は前記のようにおかした不倫の罪の為に生か死かと迷つていましたので食う事や着る事はどうでもよい、まつ先に死の問題の解決がほしかつたので、川村兄に忘れもしません「もう明日からは来ない。」と、帰る道を歩きながら話しました。

兄は温厚な人柄ですので、私をいさめて、「蘇掛君そう言わないで、十五日間終る迄聞いて見ようじやないか。」とさとされひるがえつて、翌日もその翌日も出席しました。

三日目の夜、今考え思いますと、神の臨在があきらかに幕屋をおゝつたと申しましようか、えらそうな事を言つて居りました私の心に、神こゝに在すと感じることが出来ました。

集会が終つて決心者がつのられ、何の文句も無く、一人でに前に進みました。

皆で二三十人も居りましたが、拓植先生は救を受ける順序を詳しく語られ、最初に記しました御聖言を引かられて、「貴方の感情が今夜沸立たなくても、わからなくても、此の御聖言は貴方の内に働いて、罪を許し、病を医し、力をあたえてくださるのです。只今アーメンと信じましよう。この御聖言を持つて帰りましよう。やすむ時にはこの御聖言を唱えて、今夜から神の子とせられたのだから、感謝しておやすみなさい。

只今時計が九時五十三分、これを境にあなたの紀元前と後にわかれるのです。感情でなく信じましよう。」と、教えられ神をたゝえて祈つてくださつたのです。

後になつて、たしかに御聖言通りあの時から十字架の血によつて神の前に罪が赦され、神の子とせられたことを、此の身によつて感じ、罪の重荷から解放されて、主をたゝえまつる様にせられました。

此れが私の救の御証しで御座います。

「我救い」

所司恵正

聖名を崇め、御宝血をたゝへまつる、

「さあ、かわいてゐる者はみな水に来たれ、金のないものも来たれ、来て買い求めて食べよ、あなたがたは来て、金を出さずに、たゞでぶどう酒と乳とを買い求めよ。

なぜあなたがたは、かてにもならぬものゝために金を費し、飽きることも出来ぬものゝために労するのか、わたしによく聞き従え、そうすれば、良い物を食べることが出来、最も豊かな食物で自分を楽しませることが出来る、耳を傾けわたしに来て聞け。」

（イザヤ五五章一～三節）

このお招きのみことばを、自分のものとして、信仰をもつてお応え出来る人は幸いです。

同じ意味のみことばは新約聖書の中にも度々述べられてありますが、特にヨハネ伝七章三七節以下に、「祭の終りの大事な日、イエスは立つて、叫んで言われた。だれでもかわくものは、わたしのところに来て飲むがよい、わたしを信じる者は、聖書に書いてあるとおり、その腹から生ける水が川となつて流れ出るであろう。」「これは、イエスを信じる人々が受けようとしている御霊をさして言われたのである。」

こゝで大切と思われることは、生ける水とは御霊のことであると、ヨハネ伝が特に註釈を附してあることである。この両章共に、生ける水である御霊を、好むがまゝに、だれにでも与えるから、来たりて飲みなさい、受けなさいと、主のお招きのおことばであります。

私は、約五十五年前、大正七年十二月二十六日の夜、藤村壮七先生主催の家庭クリスマス祝賀集会に、友人の勧めで出席し、生れて初めて、真の神様のいます事を知り、同時に、人間が造り主なる神様と断絶されているのは罪のためであること、罪の代償は死であること、またその罪を赦して神様のもとにたち帰らせる道が、主の十字架の代償受難に依つて既に切り開かれていること、「もし、私たちが自分の罪を告白するならば、神は真実で正しいかたであるから、その罪をゆるし、すべての不義からわたしたちをきよめて下さる。」

（第一ヨハネ一章九節）

ことを教えられました。このお話は、私の肉体の耳と、たましいの耳とに響き渉つたのです。

そこで、直ちにその晩その場で、これまでに犯して来た罪を示されるまゝに、藤村先生と神の前で告白し、すべての罪が赦されて神の子とされたという喜びと確信とが、腹の底から湧き上つて来て、感謝の涙が止め度もなく流れ、顔一面涙で洗われたのです。

集会を終えて寮に帰る道すがらも、足は浮々として宙を行く様な心地でした。

その夜、更に示された罪とがを悉々手紙に認め、藤村先生宛に、翌朝ポストに投函した時の気持は、身も魂も軽々となり、詩篇三二篇一節にある様に、そのとがゞゆるされ、その罪がおおい消される者のさいわいを満喫して悦びに浸つた事は、五十余年後の今日も、尚脳裡に新たであります。

これが私の感謝に溢れた新生の証してあります。

イスライルの民がエジプトの奴隷の身から救い出され、神に導かれて黄海を渡り、約束の地カナンを目指して荒野を旅行中、度々神の試練を蒙い、不信仰に陥り、ために多くの民が荒野で斃れたが、ヨシヤと信仰を共にする一隊だけが、約束の地に向つて進発し、契約の箱を先頭に激流のヨルダン川に踏み入つた。

神の約束を目指して、足もとを顧れず、黄海を見事に渡らせ給うた主を信じて突進した。果せるかな、主はヨルダンの激流をせき止めて通路を設け、無事に約束の地に渉らせ給うた。これと同様の事が私の信仰生活の上にも起つて来つたのです。

大正七年四月七日、大阪の日本橋一丁目にあつたフリーメンジスト教会で、何辺貞吉牧師に依つて洗礼を授けられた。この時の私の信仰は、主がヨルダン川で、ヨハネから洗礼をお受けになり、水から上がられた時、聖霊鳩の如くに主の上に降つたとある様に、どうぞ私にも洗礼と同時に御聖霊をお与え下さる様にと祈りつゝ受洗致しました。

信仰が未だ整つていなかつたのか、この切願は叶いられませんでしたが、私は決して失望は致しませんでした。時来らば神は必ず約束の御霊を与え給うと固く信じて居りました。

これは藤村壮七先生の御指導の賜であつたと、今も感謝致して居ります。

私は、大正十年四月、勉学生活を終えて、実務一筋に打込む様になつてから、地位が良くなり、収入が増加するのと反対に、魂に物足らなさを覚え、教会務めが熱心であればある程、益々魂の空しさが切実となつて来た。斯くして、大正十二年一月を迎えたのである。

此の時、東京落合のキリスト伝道館から、藤村壮七先生差し出しの一枚のはがきが届いたのです。

拓植先生に依る落合聖会の案内状である。渇き切つた魂に生ける水えのお招きである。

無我無中で上京した。拓植先生の説教には悉く共鳴共感、我魂のうえ渇きは忽ち癒され、拓植先生の内に働き給う御霊がたまらなく慕わしく、これを頂戴するためならば、如何なる犠牲も厭うところではなく、神の約束を固く握つて突進する決意が与えられた。

「天の父はなおさら、求めて来る者に聖霊を下さらないことがあろうか。」（ルカ十一章十三節）

「たゞ、聖霊があなたがたにくだる時、あなたがたは力を受けて、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、さらに地のはてまで、わたしの証人となるであろう。」（使徒行伝一章八節）この二つの約束が我上に実現するまでは、野に寝ても、山に寝ても求め続けようと堅い決意が与えられた。主はこの時、御聖霊を御受するのに妨げとなるものを一々御示しになつた。

示されるまゝにそれを捨てゝ行つた。それは一時預けではなく、保管依頼でもなく、後日後ろ髪を引く様なものは一切、根こそぎに捨てゝ、後戻り出来ない標、神標の前にも、サタンの前にも背水の陣を布いて進んだ。それは肉と慾と情とを十字架に釘付けして進む事であつた。（ガラテヤ五章二四節）

一週間に亘る落合聖会終了の翌日は、感謝会であつた。主の御聖別は、更に此日も我上に続け給うた。

粒々辛苦十ケ年間で築き上げた会社の地位も最後の献げ物として根こそぎ主に捧げる事に決意した。

拓植先生、藤村先生その他、人に頼る心も捨て切つて、地につけるもの一切を捨て、たゞ御聖霊を求める信仰一本に集中させられた。

斯くして、大阪に帰り、早速会社に退職の手続きを取り、持物の焼却棄却処理を済ませて、三月五日から開かれる岡山聖会に出席しました。

これまで地に付けるものが一杯詰め込まれていた我

魂から、これらのものゝ一つも残さず捨て切つて終つたので、我魂の中は全く空虚となつて終つた。人の魂の中には、サタンが王座を占めるか、主が王座を占め給うか、どちらかである。両者共存はあり得ないし、また両者不在も耐え切れない事であつた。

岡山聖会第二日目の夕食後、町外れの稲刈りあとの田んぼに参り、静かな積藁の影で待ち望んでいた。そして主に訴えた。我魂の空虚を遠かに、約束の御聖霊を賜うて満し給えと、その時、静かに、我魂も、頭脳も、顔も全身全霊御聖霊に満たされた。殊に腹は満腹の感を呈し、岡山聖会の標語、「我は今より主なり、われ行わばたれかとどむる事を得んや。」（イザヤ四三章一三節）このみことばが自分の腹から聞えて来た。

またこれまでに体験したことのない安らぎに包まれ、「ヨハネ伝十四章二七節」の息に入れられた。思わず知らずの内に、あゝ主よあなたはこの様な有難いお方でしたかと讃歎の言葉を申し上げる外はありませんでした。「わたしのいましめを心にいだいてこれを守る者はわたしを愛する者である。。。。。。わたしもその人を愛し、その人にわたし自身をあらわすであろう。」（ヨハネ十四章二一節）このみことばの実現でした。

斯る体験は主にあがなわれたる者の確証を深め、イザヤ五一章十一節が自分のものとなります。

感謝に満たされて宿舎に帰り、藤村先生と拓植先生に報告しましたところ、拓植先生が申されるには、主が今あなたの内にきよめ主として宿られたのですから、今後は内なる主の御声に良く聞き従つて行動することが大切ですよと諭され、頭上に手を置いて、「見よわたしは世の終りまでいつもあなたがたと共にあるのである。」（マタイ二八章二〇節）と祈つて下された。

爾来五十年間、如何なる時にも主が内にい給う事を確信し、「わたしは常に主をわたしの前に置く。主がわたしの右にいます故、わたしは動かされることはない。このゆえに、わたしの心は楽しみ、わたしの魂は喜ぶ。わたしの身もまた安らかである。」（詩篇十六篇八。九節）が日々の体験となる様にされました。

今、私の希望と感謝を一層深くしているみことばは、コロサイ書一章二十二節です。「しかし、今では御子はその肉のからだにより、その死をとおして、あなたがたを聖なる、傷のない、

責められるところのないものとして、みまえに立たせて下さつたのである。）更に、（使徒行伝十三章三十八節）モーセの律法では義とされる事の出来なかつたすべての事についても信じる者はもれなくイエスによつて義とされるのである。」ハレルヤ、更に感謝に堪えない事は、常に主の御宝血を崇める常習性を与えられている事です。

主の御宝血の崇められている所をサタンが侵す事が出来ません。またサタンの働く時、御宝血を崇めて主により願めばサタンは退散します。ハレルヤ、偉大なる御宝血の力を日々体験させて頂きます。「主にあがなわれたものは、歌うたえつゝシオンに帰つて来て、そのこうべに、とこしえの喜びをいただき、彼らは喜びと楽しみを得、悲しみと嘆きとは逃げ去る。」（イザヤ五一章十一節）此の聖句も今私に与えられている讃美のみことばであり、証しです。ハレルヤ感謝。

以上は五十五年間に亘る私の信仰生活の概要であり、過去の恵み、現在の恵、更に永遠に繋がる恵の証しです。此の間、失望に陥つた事がなく、行き詰つた事もなく、希望と感謝の生涯を頂いて参りました。以上

「母親失格」

大田邦子

娘の結婚と云うはじめての経験を通し、神様より大きな試みを受けました。

あらゆる角度より問いかけられ、探られ、心の状態をすべて暴わにさせられました。そして、今迄にない厳しい悔い改めの機会を得ました。

娘が嫁ぐに当りまして、様々なことがありましたが、一番悲しく苦しみましたのが、私自身の己の問題でした。

折にふれ、事に当つて砕かれました己のいくつかを記させて頂くことによつて、神様の前にはつきりさせておき度い願いと、私の人生の一つの転機のこの時、己を無しくすることによつて、新たに神様の力を得て大きく恵まれつゝあることに気付かせて頂いた感謝の気持とで、一大決心、勇気を奮つて投稿させて頂きます。

私は、九年前受洗、過去の己に死に、新しく生れ変つて出発したつもりです。

一見醜い己には、常に失敗し悔いながら神様の憐みに寄り頼んで今日まで歩ませて頂きました。

ところが、大変悲しかつたのが、美しく装つた己が根を張りまことしやかに居座つていた事です。

子供を育てゝ行く時、親として一応、夢があり理想があります。でも、信仰を与えられるに従つて、子供にどうあつて欲しい、こうあつて欲しいと願う前に、自分の歩みを整えるのが私の目安でした。

だつたら、主に従う者として、祈りつゝたゞ黙して神に委ね、子供の成長を見守つて行けばよいものを、よき母親であり度い、よき導き手であり度いと云う己の願いの先走りで始終エス様より頭をコツンでした。

導き手であり、完成者であるエス様を足台にしている有様です。この様な己の失敗は、日常数えきれません。余り性懲りもなく繰返すので、愛のみ手を持つて大手術を受けなければならなくなつたのだと思います。

こんな心の貧しい母親の薫陶？を受け、成長した娘が此度嫁いで参りました。

皆様から「お目出度うございます。ご安心ですね。」と心からの祝福のお言葉に、私は「有難うございます。」と云いながら涙が先に、これではいけないと思うと顔がこわばつて来ます。

自分自身でどうすることも出来ない心の状態、娘は今、良き伴侶を得て親の巣を離れ、希望に満ちて自分の翼で自由に羽ばたこうとしているのに。。。。。何故だろうか。。。。。

私は常々娘が生涯信仰を持つて歩んで欲しいと願い、祈つて参りました。その願いをも叶えて頂いたのだから、たゞ感謝しておればよいものを。。。。。何時しかエス様も何処えやら心の乱れた状態でした。

主人は全く重荷を下した恰好です。（主人の冷静さに少々腹立たしく思つた事もありました。）私も以前は多分淋しい思いはしても、まず安心出来、こんなに取乱すとは思つても見ませんでした。（お友達のM姉は私が絶対この様な状態になることを見抜いておられました。）

いざ、現実となり手離して見ますと、一人つ子と云う事もありましたでしようが、私の心の中に占められていた娘の場が余りに大きいのに気付き、本当に戸惑いました。

教会内でも、経験ずみのよき先輩方の歩みや、お証しで、親子の乳離れの問題をお聞きしておりましたので、私も一応は私なりに娘との距離をおいて来たつもりでした。（M姉や主人のあれでもかしら。。。。。と云つた笑い顔、子供の迷惑げな顔が浮んで来ます。）

榎本先生もお説教で申されます様に、わが子であつても私有物に限らずと云う事、本当に心から思つてました、神様が娘を私に托され、育てさせて頂くことが私の使命であつて、大きなご用をさせて頂いているのだと云う事、又、いやと云う程承知して今日まで来ました。

実際、娘を育てる事によつて、私自身神様より大きくはぐくまれて来ましたこと、それにも増して神様を知る機会を与えられましたことに、心から感謝して来ました。

過去二十五年前の事になりますが、終戦で引揚げ、あのゴタゴタの中で、娘が与えられる、主人の病、再度の事業の失敗、様々な家庭内の問題等の試練の中で、何も判らないまゝに、常に潤き求めてきましたのが、唯〝真実が欲しい、真実に歩み度い〟願いのみでした。

その中、次第に〝何が真であつて、何に生くべきか〟を求めはじめ、暗中模索の長い年月が続きました。

娘がやつと三才を過ぎた頃だつたと思います。手を引いて、友の会の聖書研究会に通ううち、ぼんやりながら求めて来たものに出逢わせて頂いた気持を今でも忘れる事が出来ません。そして、本当に迷いました。

一時は苦しさの余りすべての事から逃げ出す事も考えました。でも、その道は内からも外からも閉ざされてしまいました。（もう既に神様が働いて居て下さつた事を後になつて感謝したことです。）あの時も己との斗いをはつきり覚えてます。

その様な中から救われ、生きる目標をはつきりさせて頂き、多くの方々の祈りに支えられ、傷つきながらも神様のみ旨を果すことに感謝と喜びを味つて参りました。

傷めるあしを折ることなく、ほのぐらい燈火を消すことなく、真実をもつて道を示さん。

そして、只今家族が一緒に豊かな主の恵みの中において頂いているこの身を感謝して来ました。

「われ限りなき愛をもつて汝を愛せり、故に我絶

えず汝を恩むなり。」

娘も十年前、自分の意思で受洗しましたが、その頃の単純な信仰より、一時は神様に背を向け、不信仰の状態が続きましたが、祈りに応えられ、そんな娘をも捧え、結婚によつて主に仕える生活に入れて頂きました。本当に感謝でした。

長い年月、これらの多くの事を通し、素晴らしい主の導き、み霊の働きに云い尽くすことの出来ない感謝で歩んで来ました。

ところが、感謝で歩んで来たつもりの裏側に、大きな己が潜んでおりました。娘の婚約期間中、やはり母親として複雑な心境は、どうすることも出来ませんでした。

その都度、「もしわたしたちが、彼と共に死んだなら、また彼と共に生きるであろう。

もし耐え忍ぶなら。。。。。」のみ言葉にやつと支えられて来た状態でした。

結婚式も、感無量ではじめから終り迄涙でした。

その後も云い知れない淋しさと虚脱感も手伝つてか、あんなに神様のみ業を崇め感謝してましたのに、すつかり魂に喜びがなくなり、過去の歩みがいとおしくなつて来ると共に、次第にそれが高じ、神様のあわれみによつて今日あることも忘れ、己の歩みとして感傷的になり出し、つい些細な娘の態度や出来事に感情が高ぶりどうすることも出来ない状態になりました。

何時しか神様より托された子供で、どの様な実を結ばせて下さいましようとも、それは神様のみ旨で、たゞよい願いで育てられて来ました今日迄の歩みが、何時しか己の働きにすりかえられ、高慢になつておりました。この大きな己にすべてがかたくなになつていたのです。

〃後のものを忘れ、前のものに向つて、からだを伸ばしつゝ目標を目ざし走り。。。。。〃

のみ言葉が頭に浮びますが、力がありません。本当にはじめの愛より離れてしまつている事に気が付きました。

「あなたはどこから落ちたか思い起し、悔い改め初めのわざを行いなさい。」

この時も、古き生活に死んだ筈ではなかつたか、？と鋭く胸を刺されました。

幾度となくアブラハムの信仰の一しずくなりと切に祈りました。でも、すべて頭での理解だけでみ言葉に全く力がありません。

エス様と叫び続けながらも、空しさと、焦りですつかり疲れ果てゝしまいました。

人様の時には冷静そのもの、批判も出来、お話しも出来るのに、当事者となつた今、何たる醜態か、私の信仰はたゞ口先だけの信仰ではなかつたのかしらと。・・・・、信仰の戦いと肉の思いで、もうズタズタに引裂かれた自分の姿を神様の光に照らし出された時、私はもう救われる余地がないのではないかと、たゞたゞ失望と落胆のみでした。

どう仕様もない苦しさに、しばらくわが家を離れ度くなり計画しましたが、又しても内からも外からも閉ざされてしまいました。その時、「わたしの愛の中に居なさい。」と慰な小さなみ声を聞きました。もうあとは涙でした。

み霊の働きを受けることの出来なかつた自分の姿勢が悔やまれてなりませんでした。

全く母親として資格ゼロです。

その様な折にいたゞきましたT兄からのお便りで、「主からの慰めをお祈り申し上げます。」に大変励まされ、嬉しゆうございました。

此度の経験から、人の愛のいゝ加減さを知らされると共に、計り知ることの出来ない神の愛の一部分にふれさせて頂いたお恵みを味わゝせて頂いております。

やつとみ言葉に光が放たれ、己との戦いに希望が持てる様に整えられて参りました。

〃己を捨て、己が十字架を負いて、我に従え〃

本当に感謝でした。

娘を手離してから、しみじみと人生のたそがれどきを味いながら〃もうわが事すべて終りぬ〃と云つた感じて、しばらくは虚無の状態でしたが、只今は神様より生かされている者として大変不敬けんな事でしたと悟らしめて頂きました。

娘達が新しい人生にスタートしたと同じく、私も、〃事終りぬ〃でなく、これを転機に新しい人生に歩んで行こうと心に決める事が出来ました。

娘の結婚に際し、榎本先生より「信者の結婚は神様の前に献身の壇を築くことである。」と教えられまし

たが、私にぴったりでした。

娘を神様にお委ねし、私に献身の備えをして頂き、今一度新しく生まれ変る機会を与えていたゞきました事を心から感謝致しております。

更に、神様に愛されている事に、六月二・三日大濠公園教会での聖会に出させて頂き、その時のみ言葉に「今はエホバの働き給う時なり」に示されました如く、卑しいものを取り去つて自分を清め、主の働き給う器となることの出来ます様、み霊の助けを受けつゝ、残る生涯を全うし度く思いました。

この聖会は、私にとりまして本当に卑しい己に苦しんだ後だけに最高の恵みの時でした。

只今では臆することなく、神のみ前にひざまずき、感謝をもつて悔改め立返らせて頂く事が出来ました。

蔭にあつて祈り支えて頂きました先生ご夫妻はじめ多くの兄姉に心から感謝申し上げますと共に、神様の御計画に改めて感謝し、霊感賦五三章昨日も今日もエスはいつまでも。。。。。と口ずさみ讃美して居る今日此頃でございます。

最後に、どうか新家庭の歩みが、主の働き給う器となつて整えられんことを切に祈りつゝ。。。。。

ペンを置きます。

完

「今は主のはたらかれる時です」

内海宮子

この尊いみことばによつて、六月二日から四日までの福岡聖会に導かれ、日曜礼拝を除いて、最後の感謝会まで出席することが出来、心から感謝いたしました。

一回一回の集会によつて、恵まれたのはもちろんですが、今度の聖会では、大濠公園教会の方々とも、はじめて、食事の準備をお手伝いしながら深いお交りの時を持つことが出来、そのふれあいの中でも、多くの言葉に表わせない幸な時を得ることが出来ました。

どんなに忙しく、お疲れの中でも、いつもニコニコと私共に接して下さつた藤掛さん御夫妻のことや、とても賑やかで忙しかつた花田料理学校の事等、沢山の思い出が出来ました。

特に、花田学校では、私は随分沢山、花田さんから叱られ、忘れられません。

ごぼうの削ぎ方から、お茶碗の洗い方まで、その都度大声で叱られ、初めはその声に驚かされ、びくびくして居ましたが、だんだん馴れるにつれて、こちらも厚かましくなつたのか大声も気にならなくなり、かえつてその言葉の中に、私達に対する思いやりと優しさを知りました。

婦人会の方々が、朝早くから炊事を手伝われているのを見て、松岡先生が、御主人をほつたらかしてそんな事していていゝのかね、と声をかけられたのに対して、或る方が主人より神様の方が大事ですから、と返事があり、そんな事を言つて、と冗談半分な此の会話の中で、私達が日頃の生活の中で、どんな時にも先ず神様第一の生活をしなければならない事をはつきり示されました。

三日間の聖会も無事に終り、帰りの汽車は満員列車でしたが、不思議に榎本先生の後に従つて行くと、全員座席に座つてゆつくりと帰る事が出来ました。

こゝにも私達が思案することなく、一切を主に任ね、能力ある神様に従つて行くだけで、平安と恵みを与えられる事を、体験を通して教えられました。

聖会の後も、こうして「ぶどうの木」に投稿しようと、勇気を起こして下さり、一人一人の信仰により、時に応じて、主のはたらかれることを改めて知らされ、

感謝の極岡聖会でした。

☆☆ 柘植先生書簡集抜粋 ☆☆

大正十五年五月十九日

M。W 殿　　熱海　柘植　不二人

お手紙拝見致しました。事こゝに至つた事情については深く御同情申し上げます。しかしながら失敗は失敗としていくらでも悔改むべきもので失敗したからと言つて御用を断るというのは道が違います。

失敗をして神様の方からもはや御用はさせないぞと言われても今一度御憐みに依り頼むのが当然です。これが神の御愛の精神、お憐みの御旨に答える事です。何卒失敗は今一度御血潮を見上げて赦しを求め、御用は御用として忠実になさつて下さい。

先日お話し申し上げたヨハネ第一書二・一〜二の如く主は我らが今もなお赤子ですから執り成して居られます。全く赤子となつてお起ち上り下さい。

失敗をしてその上御用までしないなどへりくだる代りにじれた事を悔い改め、千度倒れゝば千度、万度倒れゝば万度悔い改めてお進みになつて下さい。奥様にも余り心配しない様お話し下さい。互に主の前に今一度お憐みを求めて下さい。。。。

「ぶどうの木　聚歌」(II)

X。Y。Z

第五章

その力なんぢにあり、その心シオンの大路にある者は、さいわいなり　(詩八四篇五節)

去年からのいろいろな肉体的な試練の中を通して、主が何を教えて下さつたか、今はつきり悟る事が出来ました。

一時は罪の意識がおゝいかぶさり、周囲の状況によつてぐらぐらしておりました私でした。今思い出して恥かしい気が致します。

集会に集う事に依つて、霊的に赤ん坊の私は、先生を通して主の御言葉を心の中に受取る事が出来ました。

集会に集う事（この事も、主のお恵みである事を先日教えられました。）が如何に強められ、主の聖旨や、主の御愛を知る事が出来るか。。。。。。感謝です。

以前はそれ程まで渇きも無い私でしたが、主はこの様な者を目に止めて居て下さつたのですね。

試練の中に在る者は格別主に近づけて頂く必要があると、つくづく思いました。

「倒れても良い、教会で倒れるなら倒れても良いではないか。」との主人の励ましの声に、主の為さる事の素晴らしさを、今知る事が出来ました。

身体の状態は未だどうやらこうやらで、悪い時もございますが、今は「主を恐れる者よ、主に依り頼め、主は彼の助けまた盾である。」の御言葉を頂いて闘つて居ります。

主人も奥様する程元気になり、此の頃は畑を耕したりして居ります。

畑の中の石ころを取り除く度に、「私の心の中の不信仰な、かたくなゝ、石ころを神様に一つ一つ取り除いて頂いて柔かい畑となつて、主の御言葉の種を丸呑みに受け入れさせて頂けるのだ。」と思いました。

先日教えられました様に、「いつも喜んでいなさい。たえず祈りなさい。すべての事に感謝しなさい。」の御言葉が、今ひしひしと心にしみてまいります。

いろいろと忙しい日々ですが、一向それが苦にならず、嬉しくて頑張つて居ります。

いざ主に任せて、今年の正月「主の愛を身を以て知り度い。」と祈つて参りましたが、本当に少しづゝ神様の真理を悟る事も出来、又、御言葉も自分流にでは無く、はつきりとひとつひとつ教えられまして、今迄と違つた目で総てを見る事が出来る様になりました。

此の世的には、余りにも問題が多い様に見えるでしようが、私共は、主に望を置いて、励んで居ますから感謝です。

第六章

もつとも大なるものは愛なり。

（コリント第一章十三節—十三）

クリスマスを迎えます都度、主の御恵みを、心新に覚えさせて頂いております。

あのおそろしい罪の中から救い上げていたゞき、罪のなわめから解き放つていたゞいたのみか、歩み進むにつれ、益々多くの群を与えていたゞき、その交りを楽しむ事を許していたゞき、この様な歩みが備えられて居る事は予想だにしない事でございました。感謝で

ございます。

とりわけ、そちらでお養い頂きました、〇年間の期間に、愛して下さる主の愛について、徹底的に教え導いて頂きました事は、愛に根ざし、愛を基とした信仰（エペソ三章一七節）でなくては益なしと、教えて頂きましたことは、此方に於ける信仰生活の根本となり、私が他人に申し上げているおすゝめは、みんなそちらに居る間に先生を通して教えて頂いた事ばかりだなあと、いつも思い感謝する事でございます。

又、こちらで教えていたゞきました大きな事は、ヨハネ第一章一〜九節）でございます。

おそれおのゝいて己が救いの達成につとめよと、注ぎ給う御愛にお応えする方法も教えて頂き、一つ所に止ることなく、絶えず成長せよと導いて下さる、神の御恩愛を事毎に覚えることでございます。

第七章

汝らわが愛にをれ。

（ヨハネ十五章九節）

あなたがたはイエス。キリストを見たことはないが、彼を愛して居る。

現在、見てはいないけれども、信じて、言葉につくせない、輝きにみちた喜びにあふれている。

（ペテロ第一章一〜八節）

主の御降誕心からお喜び申し上げます。

書簡を頂いた度に、御返事を早くと思いながら、父は朝早くから活動を始め、主人や子供達は夜ふかしをするので、なかなか自分の事が出来ません。

日中は母や妹が二人のチビさんを見てくれますが、夜のわずかの時間、私にいろいろ本を読んでくれとせがまれます。私も聖書を持つて子供は絵本を持て床に就きますが、私の方が直ぐ目がつぶれてしまい、絵本も満足に読んでしまわないので、〇〇（上の子）は、「お母さんはつまらないな、直ぐ何かわからない事ばかり云い出すんだもん。」と云つては、独りで絵本を見て居ます。とにかく座つて居ても、ねむ気が寄つて来て困ります。

今年をふり返つてみますと、私にとつてはこんなに

心配を重ねた事はありませんでした。

昨年末に、昔父母が商売して居た時代に、親しくしていた熊本の取引先の御主人が来られて、昔話に花を咲かせ、再び取引しようと云う事になり、最初五十万円相当の商品を送つたら、思いもかけなかつた、相手方は倒産寸前で、何処も取引出来なかつた処だつたのです。直ぐ御達しました。

父は何度も足を運びましたが、一文も取れず無駄足をふむばかりでした。

三月。四月に二人の妹達が、東京の私立大学の入学（一人）卒業（一人）と云うわけで、母は一ヶ月余り東京に滞在しました。

出費は当然でしたが、二人のチビさんの世話やお店の事務、家事等で疲れてしまいました。

五月には、税務署の書類調べがありました。

補助簿は私がしますが、締括検査は経理事務所に任せておりました。専任経理士が代つたので、事務処理に誤りがあり、当然出す税金でしたが、五十万近くの税金を納めさせられました。（三年間）。

七月には、私達の寝室の枕元に置いてあつた二十五万入りの金庫を盗まれました。

警察は内部事情に詳しい人か、家族の狂言かも知れないと皆んな調べられました。

五月に自家の密柑山が忙しいからと、退職した若い男を調べ度いが、何か悪い事をした事は無いかと警察から問合せがあつたので、一件、店の機械を盗んで売つているのを伝えました。

自供したゞけで三年間の勤務中に四十万円近くの商品を盗んで居た事がわかりました。金庫の盗難はわかりませんでした。

いろいろな事が次々と起るので、両親は毎朝毎夕、昔を懐しがり、こぼします。

何かしら、一生懸命働いて居るのに次々と大事が起こり此の次はどんな事が起るのか知ら、と不安でした。

でも神様は皆んなから悪く云われても、叱られても、その中で私を支えて下さり、ヨブの苦しみを思い出し、神様に従順であつたヨブでさえ、いろいろな比較にならない苦難を受けながら、神様を讃美しつゞけた様を思い、元気づけられました。

神様は私を創つたのだから、必ず持ち運んで下さる

事を信じ、たゞ祈つて居ります。

若い頃（今でも若いのですが）前田教会に通つていた時代に、種々のお話を聞いていたのが思い出され、誰が何と云おうと神様が一緒に居て下さると信じ、平安を取り戻しました。

幸、災、良、悪、共に唯十字架にのみ潔くせらる。。。。讃美歌の一部を思い出し、能力ある十字架に信頼しました。

どんな時にも、神様が私を守り支えて下さるのを知り、本当に一人感謝しました。

此の素晴らしい福音を主人にも分かちたいと思いますが、商売商売と仕事に追われて居るのを見ると、神様が此の地に私をつかわして、小さな種を蒔かれたのだろうと思い、家族の救いを祈つています。

先生が毎月一度書簡を出されるのだろうと思い、翌月も楽しみにしていました。

御返事をと思い乍ら、あの事もこの事もと思うだけで、なかなかペンを執れず時がたちました。御返事を書かないので、書簡が送つて来ないのだろうと思い、事務机の引出の中から何度も書簡を引き出し、読み返してました。

どこから落ちたか自分で反省する機会を与えられ深く感謝し、悔い改めさせられました。

再び書簡が送られたので、大喜びで封を切りました。

今年は神様が私にいろいろの試練を与え給いましたが、皆私の長いであろう人生の途中で、為になるよい事に出合わせて頂いた事、感謝しています。

特に神様に祈り親しく近づけてもらつた事は、本当に素晴らしく思います。

第八章

我かぎりなき愛をもて汝を愛せり
故にわれたえず汝をめぐむなり
（エレミヤ三十一章三節）

暑中御見舞申し上げます。

うだるような暑さが続きますが、先生はじめ皆様には如何おすごしでしようか。お伺い申し上げます。

私の方は、むし風呂同様の家の中で、赤鬼みたいになつて、毎日暑さと戦つて？おりますが、主の憐みに

よつて、健康を与えられ、ともかくも、今日まで元気ですごさせて頂いている事を感謝しております。

昨春、待ち望んでいた赤ちゃんを召されて一年余、悲しみの中ではございましたが、それまで、全く気づかなかつたような、自分の罪の深さにも気づき、いろいろ悟ることも多くなつて、悔いた心で神様を見上げ、もう一度、神様の憐れみを受ける者になり度いと祈つておりましたが、神様は、愚かな小さき者の祈りにも目をとめて下さり、私の悲しみの涙を拭つて下さいました。

今迄申し上げませんでしたが、神様は、私に再び新しい命を与えて下さり、十二月初旬出産の予定です。

幼児を亡くして一年、他の人達の出産とか、おめでたの話を聞くたびに、我が身のことを思つて、悲しさ、情なさ、羨ましさなどが、どつちやになつたような何とも名状しがたい気持で身の細るような思いで、よそ様のうれしい話をきいて居りました。

自分がこの様な中を過つて見て、はじめて、世の中には、人のおめでたい話をも、こんなに複雑な気持できかねばならない立場の人もいるという事を知りました。

死んでしまつた児の年を数え、同じ年位の児を涙なしで見る事は出来ませんでした。

私に再び子供が生れる事を知つた時、年金病院の玄関前のバラの花壇のところで、うれしさの余り、おいおい泣きました。

昨春、同じこの場所で、うつろな心でこの美しいバラを、幸せな気持で見る日が私にあるだろうかと、涙でぼやけてしまつたバラを見ていた事を思い出す時、それから一年後、大きなよろこびをもつて、同じバラを再び見る時、本当に、神様の大きな御愛を、身辺に感ぜずには居られませんでした。

この喜びを世界中の人に言つてまわりたいほどの衝動にかられましたが、昨年の自分の事を思うと、適当な言葉で言いあらわす文才がないのがとても残念ですが、何かどこかで、ためらうものがあつて出来ませんでした。

今先生に、うれしいお便りを差し上げる事が出来るのは、今まで先生はじめ教会の方々の心からの祈りを神様がきいて下さつたからで、本当に心から感謝して

おります。

主人は、同じ悲しみ、苦しみの中を通る事に由り、前より一層相手へのいたわりの心も生まれましたし、又、夫婦としての深味も、もつと増したように思います。

召された幼児は僅か〇日の地上の命でしたが、私達に実に多くの事を悟らせてくれました。これも、やはり神様の深い御旨であつたと、今こそ、心から確信している次第です。

愛する児は、私達家族の心の中にいつも生きています。すし、この死を無駄にしない為にも、私達が、素直に神様に従うことの出来るよい信仰を持つて、しつかり神様につながつて歩み、神様の御心にかなう者となつて、天国に入る鍵を与れられて、世の終りの時再び、相まみえる事が出来るようにと願つております。

月が満ちて、安産が与えられますように、どうか、お祈り下さいませ。

「玄海遊歩道」

安部　タマエ

「主、われらの主よ、あなたの名は地にあまねく、いかに尊いことでしよう。あなたの栄光は天の上にあり。」

（詩篇第八篇一節）

一月十六日、教会で腰かけて説教を拝聴するのが困難な程の腰痛が、いやされていたので、たゞ感謝でございました。

五月三日、ひびき灘はどのあたりだろう。

きつと安東さんが教えて下さると信じて、若松の高塔山に、お供させていただきました。

汗ばむ程のお天気で、高塔山で小休止。西に向つて降りる時、此所が、ひびき灘と教えていたゞき得心がいきました。

桃色のつゝじ、野いちごの白い花、名も知らぬ草花が、黄色や藤色に彼方此所に咲いて、登り下りの道でした。

三葉や、たけのこもあるらしく、又ひなどりの話も

出ていましたが、私は足の裏が痛くて、たゞ歩くのが一生懸命でした。でも、とうとう遅れてしまつて竹林の中を一人で下つていると、かさかさと音がするのです。安東さんが迎えに来て下さつたのです。

御使いの様でした。

今度は登ることの出来ない急な道に出ました。こんな所があるとは知らなかつたのです。

「ダビデの子孫として生れ、死人のうちからよみがえつたイエス。キリストを、いつも思つていなさい。これがわたしの福音である。」

（テモテへの第二の手紙二章八節）

私は目のさめている限りは、何時も思つております。お言葉に甘えて、かばんを安東さんにお願いしました。肥満した半身不随の醜女を、ひつぱり上げて下さる安東さんに、気の毒で済まなさが一杯でした。

すると、小野さんが余り遅いので、見に来て下さつたのだろうと思います。両側に、はさまつて登らさせていたゞきました。全く感謝の限りです。

先発隊が下りて来て、見晴らしの良い所で昼食を皆さんと御一緒にいたしました。

下地さんがもちの木の様な丈夫な杖を作つて下さいました。

谷川のほとりを下りましたが、かばんは高木さんが持つて下さいました。この時も白いズボンの方が手を支えて下さつて、何誰だかわからないまゝ終つてしまいました。

御迷惑をおかけした皆様方に、心よりすまなく、有難く御礼申し上げます。

養魚所を左手に、社宅を右手に見、白つぽい藤の花を左手に見、お店で復本先生に、ファンタをいたゞき、のどづゝみをうちました。

折尾迄のバスに乗りましたが、バスに乗つたことが近頃ないので整理券を取るのを忘れました。

折尾に着く頃、かばんの中に整理券が入つていました。何誰か取つて下さつた方に有難感謝申しあげました。

屋形舟、平尾台、高塔山、思い出す種々な思い出、イエス様有難うございます。

おわり

「文芸コーナー」

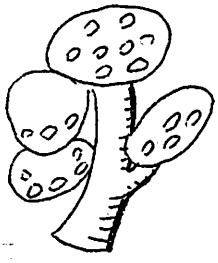
一、詩　　正野真宏
二、短　歌　　ルデヤ
三、「旅客機の窓辺にて」　　詠み人知らず
四、近　詠　　正野義雄

詩「いちぢく」

正野真宏

母から、いちぢくをもらつた
郷里になつた、初めてのいちぢく
自分たちも食べたかつたけんど
あんたたちに食べさせたくて、と
店頭に並べても恥かしくないいちぢく
おいしかつた
子を想う母の思いに
ありがたき味がした

主は言われる
すべての初なりをもつて主をあがめよ、と
これぞ捧げ物の奥義
主を想う我らの思いを
いかに喜こび受け給うかを



短　歌

ルデヤ

一、来し方の六十路の道は夢のごと
　　残るよわいは神と人とに
一、わが為に死にし十字の血を崇め
　　今日もはげまん真理の道に
一、いやしきを捨てゝきよきにあづからん
　　神の僕となりたる我は
一、あがないの主の血によりて我身さえ
　　きよめたまえり神のみわざは

「旅客機の窓辺にて」

（詠み人知らず）

○雲閉じて　見晴らしきかぬ　つれづれに
　ペン執りつゝける　冬の空旅

○雲白く　日射しに映えて　窓の下
　上に広がる　空の色濃し

○此の雲の　果ては北極。南極か
　はるか広がる　窓の彼方に

○関門の　空飛びゆけば　日輪の
　姿美し　白雲の上

○われ居れば　機は泰けしと　主を信じ
　君うれうるなと　我は告げまし

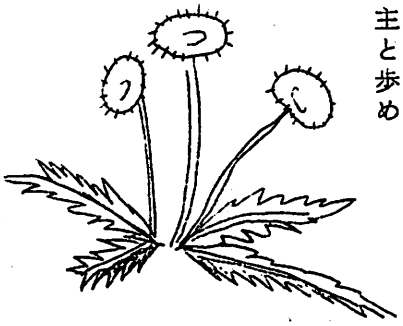
○冬空を　ゆけば上下　はた右に
　機体ゆさぶる　乱気流の中

○主は我と　ともに在せば　おそれなし
　雲の上にも　水の中にも

近詠

正野義雄

一、つゝじ燃え　ローカル駅の　人まばら
一、大霞　遠賀の里を　消しにけり
一、春深し　春闌の赤旗　なりやまず
一、春深し　灯さで帯とく　旅づかれ
一、老うらゝ　主恩になれし　罪ぶかく
一、ほのぼのと　今日の命や　花の雨
一、こめかみの　老斑かなし　春の雨
一、舟うかぶ　瀬戸の島々　旅薄暮
一、湯の宿の　捨て湯のけむり　春の月
一、菊日和　今日の一日を　主と歩め



「牧師館訪問記」

取材班誕生

五月のある日、礼拝を終えて、内海姉と松山姉は、説教のことや、日曜学校のことを話しながら帰路についていました。

話題は青年会のことになり、現在の青年会は交わりを持つている人は、ごく限られており、礼拝後も新しく来られた方や、話し合いたい人とお話しをする時間もなく、結局、青年会は、あつても無くても同じではないか、ということになりました。

そんな話しでその日は別れました。しかし、このことは以前から、誰からともなく聞かれていたことばでありました。また、その対策も何度となく試みられました。しかし、結局は芳しくありませんでした。

二。三年前から、このことに心を労していた小野姉。榎本姉。真島姉。野村姉も加わり、ある日内海姉宅に集まりました。

おいしい善哉のおもちをほゝばりながら、議論百出、こうして、「青年会、又は教会の機関紙を造つては？」ということになりました。

今の「ぶどうの木」は年に一回の発刊が精一杯、これでは淋しいので、その間に、ザラ紙のガリ刷りでよい、月に一回でも出せたなら、紙面を通して皆さんと交わりも出来、校正、印刷等共同作業を通しても交わりが出来るのに、と思いました。また、これを通し、相談し合い、祈り合うことも出来るだろうにと、思いました。

こゝまで来ると、話しはトントンと進みます。

今、「ぶどうの木」の編集者は原稿集めに苦労をしています。

他方では、すばらしい証しを持ちながら、ペンを執る暇のない人や、「お話しするのはいいが、文章を書くのはネエ。」と云われる方がおられると思います。

私達は、この様な方を訪問し、見聞して積極的に取材してはどうだろう。また、日頃の雑談の中から、メモを取り、ワンコーナーをうめてゆこう。。。。。。

ということになりました。

こうして取材班なるものが、誕生した次第であります。

そして、最初に牧師館を訪問致しました。

牧師館訪問記

（取　材　班）

「牧師館のお茶は、飲めば飲むほど恵まれる。」と云う名言があります。

私達、五人の取材班は、この名言の確認に牧師館へお伺いしました。

昭和四十七年七月三日（月曜日）

激しい雨の降り続いている一日でした。

以前から榎本先生には、取材班の出来たいきさつ、目的をお話しゝ、「最初の訪問を牧師館にお伺いしたい。」と予約しました。

前々日、わざわざお電話を下さり、「夕食を一緒にしましょう。」とのこと、私達は各自、駅場から一路牧師館へと伺いました。

雨が私達をセンチメンタルにしたのでしょう。

牧師館の玄関に立つた時、どんなに多くの方が、この牧師館へ行かれたことでしょう。そして、悩み、苦しみ、悲しみに勝利し、力と平安を得て帰られたことを思うと牧師館の玄関は輝いているようでした。

「どめん下さい。」いつも乍らの百合子先生のやさしいことばで迎えられました。

今日は、お客様でなく、早く来た者から食事の準備を手伝うという事でしたので、エプロンをお借りし、牧師館料理教室の生徒となりました。

準備はほとんどすんでいましたが、エプロンをつけた手前、台所をうろうろ。それでも何とかお手伝をしながら、百合子先生の何でもないお言葉や、態度の中からほとばしり出る暖かいものにふれ、大変楽しく過させていたゞきました。

そして、私達は大発見をしたのです。

それは、調さんが、大変百合子先生に似てこられたと思つたことです。言葉、物腰に、ハッと驚かされることが度々でした。

「自分のお台所の様に使わせて頂いているのですよ。」

と云われる調さんの倖せそうなエプロン姿は、私の心に深く残つています。

かくして、榎本先生を囲む七人の美女（？）は、食卓につきました。

この日の献立を御紹介しますと、あさり貝のおみそ汁、お魚、カボチャの煮付、きゆうりのお漬物、それにおつけもの、etc、おいしかつたこと、おいしかつたこと。取材班五人は、いさゝか緊張しながらも、よく笑い、よく食べました。

先生は、数日前からかぜ気味で食事がすゝまれなかつたそうですが、「今日は皆さんと一緒に食事が出来、とてもおいしかつたですよ。」と云われました。

やはり美女（？）訪問のきゝめがあつた様だ、と私達も満足いたしました。

ずつと昔、高木先生、伊規須先生の若かりし頃、泰子先生や、今は別府におられる東先生達が、土曜日の掃除の後で、よく一緒に食事をされた時の事を思い出され、懐しそうに話されました。

また、お客様の紅茶に、お砂糖と調味料をまちがえて入れたという調さんの失敗談など話され、食事の話題は、恵みと笑いで一杯でした。

食事が終り、「榎本牧師半代物語」を伺いました。

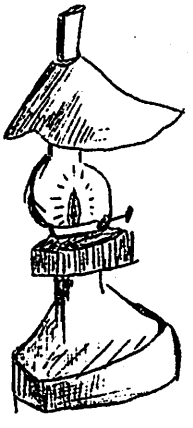
「幼少のみぎより」と、主の御業を語り始められた先生の目は、光輝いておられました。

お話しも一段落すると、「牧師通信」の封をお手伝いしました。調さんの美しい表書きに、自分の名前をみつけては喜び、又、二〇〇通という膨大な数に驚きながら、この御苦労に感謝せずにはいられませんでした。

そして私は今、あのときの、おいしかつたみようがの床づけの味を思い出しながら、ペンを走らせました。

これより始まる、榎本牧師の足跡は、あまりにも長く、今こゝに記することは無理ですので、後に別紙にて掲載することに致しました。

その時まで、お楽しみにお待ち下さい。



完

「隠忍二題」

小羊生

「わたしたちに負債のある者をゆるしましたように、わたし達の負債をもお許し下さい。」

（マタイ六章一二節）

「。。。。。わたしが憐れんでやつたように、あの仲間を憐れんでやるべきではなかつたか。」

（マタイ十八章三三節）

或人が、家庭と生活問題のために行詰り、非常な苦難と戦いの中にあつた。

それは当人に取つては、生か死かの大変な問題であつた。

彼は日夜あせりもがき、救いを求めていたのである。

然し、現実の社会には全く希望も救いも無かつた。

実情を訴えて助けを求められた私は、気の毒な彼の有様に心を動かされ、何としても、キリストの福音による以外に本当の救いの道は無いと思い、ひたすら十字架の福音と信仰とを勧め証した。彼はまだキリストの福音を知らなかつたから。同時にいろいろと気を配り、力を与えて、何とか立たしてやりたいものと、種々尽力して世話もしてやつた。

漸て、三日経ち、十日経ち一ヶ月、二ヶ月と過ぎたけれども、その結果は何の応答もない。

骨を折つた結果は無駄であつたのかと落胆した。

三ヶ月も半年も経過した今日にも、尚一片の音信もない。或はヤケを起して変な行動でも？と疑つてみたりしていた。

その間、所謂、人間的な同情や肉の愛の切売りは、なすべき事ではなかつたとも教えられた。

然し、あれだけの恩を少しも感じないで、「冷い仕打ち」と、うらんだり怒つたりもした自分の、まことに小さい事を痛切に思い知らされたのである。

愛に報いるに冷いあざけりをもつて返された時「あれだけ力を尽してやつたのに。。。。。」（否、実は神により、させて頂いたもの）と思う自分の心に、「ではお前は主から受けた大いなる御愛に対し、どんな行動であつたのか？お前はどれだけ主から憐れまれて来たのか？」との問いかけが返つて来た。「何もご愛にお答えしたものは無いではないか？憐れまれ許された

のに、何故他人をさばくのか？」。

あゝ、此処に至つて私の心は光に照らされて刺されたのである。神を認め、キリストを信じて救いに与り、許され、生かされて来た己れの真の姿が示された。

弱い他人をさばくのでなく、「父よ許し給え。」と、とりなしの祈を捧ぐべきであつた事に私は気づいた。

もし、何か、少しでも出来たのなら、主の恵みであり、己れには何物も無いのだ。

己が許されたのだから、他を許してやるのは当然である筈だ。又、大いなる、さばかるべき神への罪と負債を、主は一言も私に求め給わず、全く十字架の故に許され憐れんで頂いた自分の事を、決して忘れてはならぬと心に定めた。今更恥しい事である。

全き主の愛こそ大いなるかな。人の愛のまことに小さくみにくい事よ。それは欲の変形でしかない。

見渡す限り広い大洋の様な主の愛と、一杯のコップの水にも足りぬ、一滴の水の如き、人の小さく狭き愛である事よ。。。。。。

（Ⅱ）

何故なら一つの体に沢山のし体があるが、それらのし体がみな同じ働きをしてはいないように、わたし達も数は多いがキリストに在つて一つの体であり、又各自は互にし体だからである。

（ロマ一二章四。五節）

実際、体は一つのし体だけでなく、多くのものから出来ている。もし、足がわたしは手ではないから体に属していないと言つても、体に属さないわけではない。。。。。目は手に向つて、「お前はいらない。」とは言えず、又頭は足に向つて、「お前はいらない。」とも言えない。

そうではなく、むしろ体の中で他よりも弱く見えるし体がかえつて必要なのであり、。。。。。。あなたがたはキリストの体であり、一人一人はそのし体である。（一、コリント一二章一二～二七節）

先日、或人からのプレゼントで切符を頂いて、ソビエートのモスクワ国立交響管げん楽団の演奏会に行つた。

実は、近年殆んどこの様な会に出た事はなかつた。

昔、学生時代には時たまあつた。

テレビやラジオでは少し位は接して見たり聞いたりもしていたが、実際にこの様な世界的レベルの演奏会に出る事は皆無であつた。

さて、前の方の席に座り耳と目を集中してステージを見つめた時、百名近い楽団の人達のナマの演奏が、すばらしい音楽となつて奏されてくる有様に、グーンと迫るものに圧倒される程であつた。

指揮者のタクトに従つて、或は強く、或は弱く長く短かく、実に奇麗に各パートが全く一体となり、すばらしいハーモニーとなつて会場の聴衆を包んだ。

チャイコフスキーの曲は私には充分に理解は出来ないが、そのすばらしい音楽は私の心に強く感じられるものがあつた。

私共は、あのオーケストラの一つのパートに座つて一生懸命に自分の受持つ音符を忠実に守つている、メンバーの一人ではないだろうか。

それは、皆一人一人受持つ場所は異つていても、定められた楽譜に従つて、正しく誤りなくきれいなリズムを演奏しいく者ではないだろうか。

私のパートは、バイオリンか、チエロか、クラリネットか、トランペットか、又はバスかドラムか、それは一人一人異るものでも、互に心を合わせ思いを一つにして行く所に、すばらしい神の国の、天の音楽がハーモニイされて来るだろう。

タクトを振るは、キリストなる最高の名指揮者ではないか。或は楽譜は私共にとつては聖書かも知れない。

私もその楽譜に従つて、一つのメロデーを奏し出す者でありたいと思つた。

すばらしい天国の聖交響楽団の一パートにいる自分を見出し、各自の与えられた賜物をもつて励んで行きたいと思つた。

大いなる力の神は、私のような小さい愚かな者にも、力を与えて、どこかのパートで全うさせて下さるであろうと信じて祈つたのである。

「どうか同じ思いとなり、同じ愛の心を持ち、心を合せ、一つ思いになつてわたしの喜びを満たしてほしい。」

（ピリピ二章二節）

その夜の演奏会は、アンコールの「花のワルツ」（チャイコフスキー曲）で閉じられた。

私も、きれいなアンコールが主に在つて聽かれるなら、何と幸な事であろう。と、しみじみ思つた。
それはさんびと感謝のワルツを!!
主に喜ばれる者となりたい。

了

（一九七二・五・一〇）

☆☆ 柘植先生書簡集抜粋 ☆☆

大正十二年三月二日

落合　柘植　不二人

Y・A 様

只今岡山へ出発しようとして居るところへお手紙が参りましたので、取り急いで御返事を申し上げます。

お証しによるとあなたは自分ばかり見て居られるから失望するのです。ロマ六：六のように古き人は既に十字架上にあり（ロマ八：三）あなたに代つて釘付けられていて下さる主がそのまゝあなたの古い人の姿なのです。それをガラ二：二〇のように信じ通す事です。自分を見るのでなく、感情や思いでなく、十字架の上の事実と聖言の上に堅く立ち、悪魔が何と言つて来ても十字架を示し聖言によつて答え、どんなに古い人に訴えて来ても答えないで信じ続けて下さい。勝利の秘訣は「キリスト我が内にありて生くるなり」です。

たとえ如何なる事があつてもエペ三：一七，ヨハネ一四：一六，マタイ二八：一八～二〇等の聖言を信じて動かぬ事が大切です。

祈るにも聖言の上に立つて祈る事、聖言を心に植え付けられるために祈るようにして下さい。

全く服従して下さい。尚、イザヤ四〇：一～二の通りに既にすべての罪が赦されている事を信じて下さい。委細は後便にて。

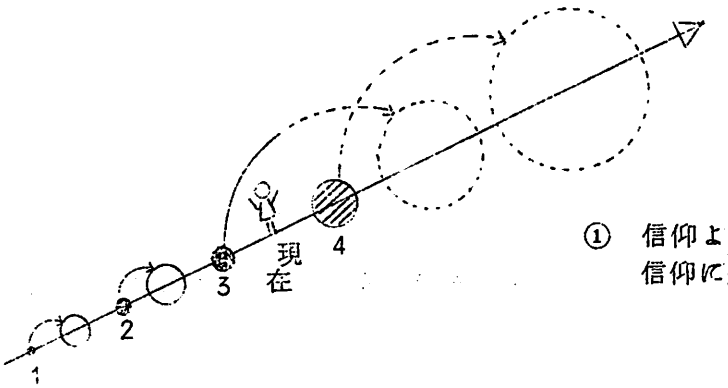
来る一五～一六日頃帰京致します。

弟さんの事についてお祈りしています。

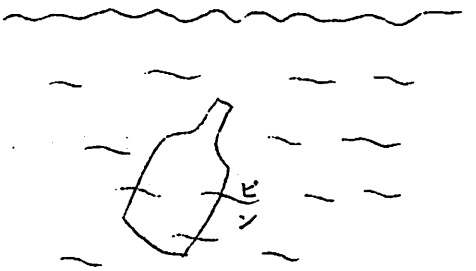
「絵による説教ノート」

伊規須　太郎

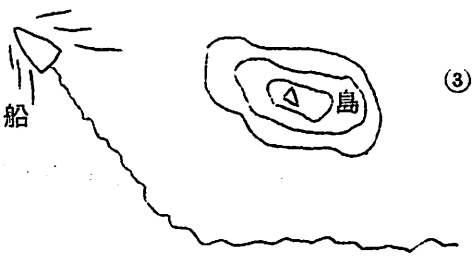
私の説教ノートには、ところどころに絵が画いてあります。
最近のノートから、いくつか御紹介しましょう。



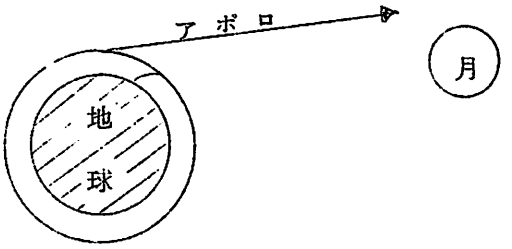
① 信仰より出でゝ、
信仰に進ましむ。



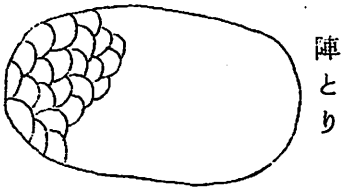
② 聖霊に満された生涯では、己が
見えなくなる。



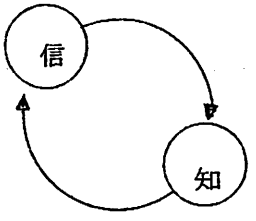
③ 神様の道。
前には見えないが、うしろには
ハッキリ。



④　悪魔の支配から脱出するには、神様の力が必要。

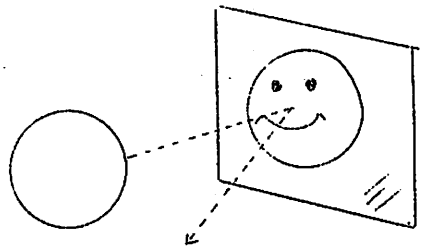


⑤　足の裏で踏む所をみな与える。

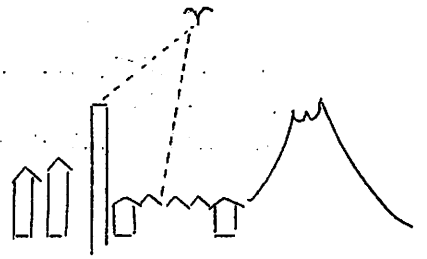


⑥　思い切つて信頼すれば神を知り、知れば信頼。（循還）

⑦　雲上の生涯には、海なし山なし。

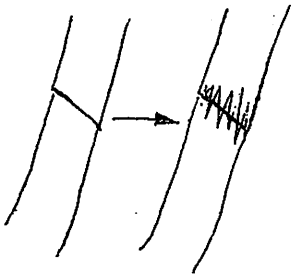


⑧　神様は鏡の様なお方。

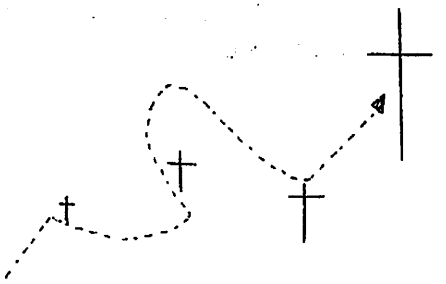


⑨　３６階建ても、高い所から見れば同じこと。

$\frac{n}{\infty} = 0$

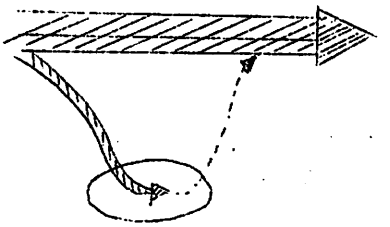


⑩　接木の奥義。



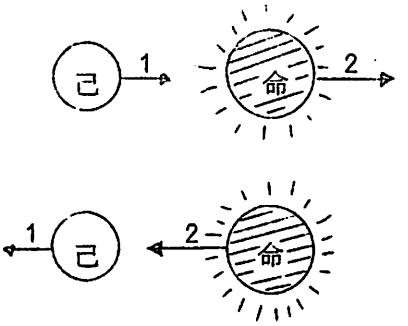
⑪　のらりくらりしていると、次第に大きな苦しみに会う。

⑫ 切出された岩、堀り出された穴を思い見よ。

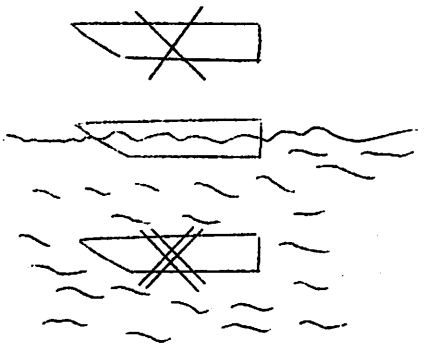


地上の生涯

⑬ 万物は神より出で、神によつて成り、神に帰す。
（地上では旅人また寄留者）



⑭ 逆真理。
自分の命を救おうと思う者は、これを失う。



⑮ 世を用うる者は、用いつくさぬ如くすべし。

以　上

「母の日に想う」

恵まれた女

「アベルもまた、その群のういごと肥えたものとを持つてきた。主はアベルとその供え物とを顧みられた。」（創世記四章四節）

母のいない母は、この日を余り心に止めていなかつた。

十三日の土曜日、事務員の若いお母さんは午前中のひとゝき幼稚園での母の日の集りに行き、坊やをつれてもどつて来た。

大きな画用紙に母の顔をかいた幼い絵を見せ、胸に赤いカーネーションをつけて、とても嬉しそうである。

日頃お勤めのお母さんと今一緒に居られる喜びにあふれて甘えている姿に、私の息子、娘達の幼ない日を思いみた。

今はそれぞれに成長させて頂き、親の手元から一歩一歩離れ、独立した一人の人間として立つ為、大きな問題の中にある。

この年頃は子供ばかりでなく、親たちも大きく脱皮するのに苦しまなければならない時のようだ。

坊や達と別れ、私も帰宅する。

Mさんは、かねてから私達の為に音楽会のキップを買つていてくれたが、頂戴母の日の前日が演奏会だつたとは有意義だつた。

モスクワ放送管げん楽団のすばらしい演奏に、只驚きと、感激で一杯だつた。演奏中、会場をうずめた観衆は、しわぶき一つせず会場には私と奏者のみ。

やがて終つた時の拍手、拍手鳴りやまぬ拍手にまだ足りないのか、又怒濤の様におしよせる拍手。

こうして二時間余りが短かく過ぎた。アンコールに答えて「花のワルツ」を聞かせてくれたのは又嬉しかつた。

こうして感激の一時を過し乍ら、Mさんは良い事をしてくれたと感謝する。

帰宅は、十時頃だつたであろうか。

Kさんが「ハイお母さん」と私に小さな箱をくれた。

私好みのハンカチーフと小さな本。何を贈つたら最もよろこんでくれるのかと心をくだいて、あれこれ考えたであろう。「ありがとう。」K君は「お母さんあ

れ見たね。」と言つた。花瓶にさした一輪のカーネーションに私は気がつかなかつた。「あなたがくれたの有難う。」彼はなけなしのお小使いから六十円はたいて買つてきた。「おれは汽車につてすごく体裁が悪かつた。」「ほんとにね。」花等買つた事もないのだから、大勢の中で恥かしい思いをしながら持つて帰つた姿を想像しつゝ、私は嬉しかつた。

この三つの贈物の全てを比較してはいけない。みんな良い事をしてくれた。最後の最も小さい贈物はレプタ二つを捧げて主に喜ばれた貧しいやもめさんに似て、心暖まる喜びを感じる。

若い人達よ、それぞれ母の日に良い事をしてくれた。それは、今日の日だけに終らないでほしい。日常の行いの中に、母の日の贈物を持つてほしい。母の喜ぶ贈物、それはよい息子、娘を持つたと感謝と共に主をほこれるようになること。それは誠に主をお喜ばせする事に通じるでしよう。

良い演奏の中に、自分と奏者と一つであつたように、私達は主といつも一つである事が出来るように祈る。

「主はくだけた悔いし心を軽しめ給わず」そして、アベルの供え物を顧められたように、。。。。。。

「小さな発見」

上野米子

お父さま、たゞいま！或る日曜日、礼拝をすませ教会の皆様方とお交りもして安らいだ気持で家に帰つた私は、庭に主人の姿を見つけ、思わず子供のような大きな声で垣根越しに主人を呼びました。

私のはずんだ声は、五月のさわやかな風にのつて主人に届いたのか？「お前、大変だよ！」と主人の声が返つて来ました。「どうしたの？何かあつたの？」私は不安を覚えて勝手口より上るが早いか庭に降りました。

もう一人の男の人が池の水面に顔をぬらさんばかりにして、じつと水の中をみつめています。

「奥さん、お手柄でしたね。小さな魚が、うようよいますよ。」それは極く親しくしている主人の友人の声でした。

私は、挨拶も忘れ思わず「あゝうれしい！」と言つて並んでじつと水中をのぞき込みました。どうでしよう。小さな小さな妻揚子の先くらいの魚が元気で泳い

ているではありませんか。「〇〇さんが見つけてくれたのだよ。」と主人の声。それは先日ランデブーの盛になつた魚に気づき、主人に頼んで浮藻に似た雑草で池に魚巣を作つてもらいました。

それ以来、主人と私の四つの目は池に下りる度に、小さな魚の姿を求めましたが、発見出来ませんでした。

そして今日なのです。一様に、ねずみつぽい色ですが、親ひぶなのように美しい色になるのかしら？。

もし之が皆元気に成長したら、池の面は、さぞや賑やかになることだろう。

でも、成魚になる迄には、力つきて倒れるもの、産んでくれた親魚のえさになる等、大変な困難があるのだろう。

私は、今朝も早く静かな池の水面をのぞきました。

ふ化したばかりの稚魚は、プランクトンのえさをあさりつゝ、気持よく泳いでいます。

明かるく見えるのもあるから大丈夫、ひぶなになるだろう。。。。。。そして細い姿揚子先の体に生きるための総ての器官を備えて活動しているこの魚に私は生きる尊さを強く教えられました。

神様の聖手になれる微に入り細に入る御業の尊厳さを深く深く覚えた次第です。

「万物は、神からいで、神によつて成り、神に帰するのである。」　（ローマ人への手紙十一章三六節）

今日も、吾が家の池には紅白の水れんが美しく装い、トンボも来て水浴びをし、みずすましや、かえるの宿にもなつております。

この春は、つい最近まで野鳥も水を慕い、しばしば憩をとりに来ました。水のあるところには生物が実り、学はずして自然と生物の関係も如実に伺い知ることができました。

高い空と、澄んだ空気と緑に囲まれた、わが山荘も神から賜つた憩の家として主を崇め感謝して心の思いが神に喜ばれますようにと祈るのみです。

題して、小さな発見としましたが、実は大きな発見かも知れませんね。。。。。。

「媒　酌」

伊規須　太郎

（昭和四十七年五月〇〇日午後三時、A兄とB姉の結婚披露宴（於八幡新月会館）での挨拶。）

媒酌人といたしまして、一言御挨拶を申し上げます。

本日は、神様の御前でA兄とB姉が厳粛なる結婚の式をあげられましたことは、まことにおめでたいことでございます。

又、本日は皆様お忙しい中にもかゝわらず多数ご参会下さいまして、まことに有難いことゝ存じます。

心からお礼申し上げます。

実は私、先程の結婚式の際、誓約のことばを聞いて、新郎新婦ともども身の引締まる思いが致しました。

教会での結婚式には随分と数多く出席して居りますが、あの「。。。。。健やかなる時も病める時もこれを愛し、これを敬い、これを慰め、これを助け、そのいのちのかぎりほかのものによらず。。。。。」というお言葉を耳にしますと、神様の光によつて自分達の原点が再確認される思いがいたします。

本日結婚式をあげられたお二人が、このハツキリした方の前でハツキリとした立場に立つて誓われたことは、何よりも尊いことゝ存じます。

さて、御列席の皆様方の中には、新郎新婦をよく御存知の方が多数おいでのことゝ存じますが、一応私の立場からお二人の略歴を申し上げ、御紹介いたしたいと存じます。

新郎A兄は、昭和二十年一月、八幡の山の手に当る元城町で御誕生になり、その後、御両親と共に大分市近こうの農村に移られ、昭和三十八年三月大分県立三重農業高校を御卒業、農林省大分食糧事務所に入られました。

昭和四十一年四月、福岡食糧事務所折尾支所（在小倉）にかわられ、同時に八幡大学経済学科に御進学、四十五年三月御卒業、現在は米穀などの検査、買入、売却等に関する業務を担当しておられます。

その間、信仰の面では昭和四十年一月頃からクリスチャンであつた職場の上司に導かれてキリスト教信仰を求めるようになり、大分県竹田の教会に通いはじめ、

翌四十一年三月二十七日には洗礼を受けて、クリスチヤンとしての生涯を踏み出されました。

その三日後には、転勤と進学のため八幡に移られた訳ですが、それ以来六年余り、最も忠実なクリスチヤンとして信仰生活を送られ、教会の諸行事や青年会活動に於ては、そのまじめで明るい人柄をもつて常に中心的役割を果して来られました。

まことに神と人とに愛される二十七才の好青年でございます。

A兄に関して、皆様がたはいろいろな面から御存知と思います。絵を画かれること、山などを歩かれること等々。。。。。。

しかし、私はAさんから果樹や農作物のお話をうかがうのが大変楽しいのです。「農業の学校を出て、家が農家で、仕事が農林省ですから。。。。。。」とはおつしやいますが、Aさんの隠れたあたゝかい一面を見る思いがいたします。

新婦B姉は、新郎におくれること約二年半、同じ八幡の、中央町に近い静かな今のお宅で御誕生になり、昭和四十一年三月福岡県立八幡高等学校を御卒業、四十五年三月に新郎と同じ八幡大学の商科を御卒業、このたび退職されるまで東南貿易㈱八幡出張所にお勤めになつて居られました。

この間、大学自治会役員をされていたことから新郎と知り合われ、共に教会に励むようになり、約二年後の昨年春、私共の前田教会で洗礼を受け、クリスチヤンの生涯に入られました。

毎年夏になると、津屋崎で教会の夏季学校が開かれますが、Bさんが大変よくお世話して下さつたことを忘れることが出来ません。

当然のことながら、子供達にも人気のある良いお姉さんでした。

現在、青年会の役員としても御活躍になつて居られます。

珠算は申すまでも無い事ですし、お茶、お花、ピアノなどもよくされる、いわゆる才色兼備のお嬢さんでございます。

私共と新郎新婦の関係は、教会を通してのものであり、言うならば一つの幹に連なる枝どうしの間柄であります。

今日、多くの人々が不安と恐れの中で生きる道を模索している時、このお二人が、共に手を携えハッキリした目標に向つて励まれる姿勢――――教会生活についても家庭生活についても暖かく、かつ、しつかりした夢を持つて居られる――――を見た時、私達は喜んで証人として立たせていたゞいたのでございます。

どうか御臨席の皆様がたも、新郎新婦の将来にあたゝかい御交わりと限りないお力添えを賜わりますよう心からお願い申し上げます。

尚、終りに一言付け加えさせて頂きますが、新郎新婦の強い希望である「クリスチャンとしての生涯を全うする」ために日曜日（水曜。木曜など）は教会第一にしたいと願つておられます。

多少説教じみて恐縮ですが、聖書の中に「神をおそれそのいましめを守れ、これはすべての人の本分である。」というお言葉があります。

ある人は仏教を、ある人は神道を、ある人は他の宗教を信じ、又ある人々は科学を信じ、お金を信じ名誉を信じて居るかも知れませんが、聖書の言う「神を信ずること」はそれらすべてを含むもの、それらすべてを越えた人間としての本分であり、その本分をつくすところに、それぞれの目的がより良く達せられるものと信ずるのでございます。

お二人が生涯をかけて追い求めようとされている、この点について、何卒、御理解と御賛同を賜わりますようお願い申し上げます。

本日は、多数ご参会下さいまして、まことに光栄に存じます。

新郎新婦の前途を祝し、時間の許すかぎり御歓談下さいますようお願い申し上げます。

どうも有難うございました。

以上

「私の朝餉」

上野米子

朝の冷たい大気につゝまれ、寂として声一つないこの山小屋のわが家、先ず戸障子をあけ、夜の空気と主によつて備えられた新しき朝の大気との交換から私の日課ははじまる。

三日程前に、主人を郷里に送り出し、子供も七時のバスで出動したあと、私はひとり静かな食卓に向いました。

夜露を宿した庭一面の芝生も、朝の斜陽が影をおとし、すべての木々が水々しく、新しくよみがえり、生気一杯のわが家の庭、私はこの時が一番好きで、この恵み、このよろこび、独りで満喫するのがもつたいないようでした。どなた方に分け与えられるものなら。。。。。と、何時もひとり感謝致します。

今朝もいつもの様に、エレミヤ哀歌三章二二節〜三三節を拝読致しました。

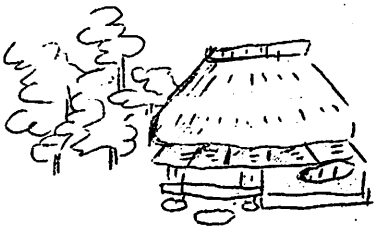
絶えることない、いつくしみと御あわれみの裡に、朝毎に新しき恵を以て恵まんとしておいでになる主に、その御真実を確信して感謝し、遠く離れた東北の空に主人を想い、又職場の子供に想を馳せ、今日一日のおまもりをお約束していたゞきました。

主婦業より何ら取得のない私、こんな素晴らしい幸の中に置いていたゞき、身の幸を思わずには居られません。

何ら遮るものも無い生涯で、最高かも知れません。

見ゆるところによらず、吾がうちなる主に恩を馳せ、主御自身から愛される者となりたいと、飯を運ぶ一はしに語りかける私のあさげです。

生の松原も、能古の島も、朝もやの中に淡い姿を映し、今日も晴れてさぞかしこの世は暑くなることでしょう。



「お隣の人」

ルデヤ

私達が海老津に来て、足掛け四年になります。やつと、お隣の空地に家が建ちました。

建築中、何度か御夫婦で、或る時は大学生らしい二人の息子さんと高校生と思つていたら中学生の娘さん三人連れて、自家用車でいらつしやいました。

御主人は五十才には間のありそうな、かくしやくとした血色のよい、いつもにこにこしていられるお方で、奥様も人のよさそうな色白のお美しい方でした。

私方の玄関の看板を物珍らし気に眺めていらつしやいました。その看板は、四年もなるので雨にさらされて黒ずんできたなくなつていますが、重荷を負つて苦労している者はキリストに来なさい。と書いてあるのを見られて、「お宅はキリスト信者ですか。」と尋ねられました。

「はい、そうです。」と私が答えますと、「うちの娘も教会に行つております。」とおつしやつたので、「どこの教会ですか。」とお尋ねしますと、「前田教会です。」とおつしやいました。

「私も前田教会ですよ。」もう親戚同志のような親しさを感じ、うれしく思いました。

次の聖日礼拝の時、日曜学校の御用している息子に聞いて見ると、〇〇さんなら僕の組にいるよと、言いました。それなら、そのお母さんきつと私方の集会に来られるだろうと信じていましたら、娘が教会に行つていても全然無関心と、其の後わかつてがつかりしました。

それは、移られて間もない頃、まだ郵便受けの備えのない時、郵便屋さんがお隣の郵便を持つて来られて、門が閉まつて留守ですから、あとで届けて下さいと頼まれました。

息子の便りを届けるのは、何とも調子の悪いことでしたが、これも伝道のためと、間もなく帰られた奥さんに渡しながら事情をお話し致しましたが、あゝ、そうですか、と軽く受け流し、娘の宗教教育には無関心のように思われました。

お話が後さきになりましたが、お隣の家移の時のことです。私達夫婦は、こういう時に厚意を示そうと思

つて、主人は作業衣に私はモンペをはいて荷物の着くのを今か今かと待つていました。

四月一日でしたが、ふるえ上るような寒い日で、雪が降つておりました。花冷えというのでしよう。

庭の桜のつぼみも大分ふくらんでいるのに、雪が舞い上つていました。

急に表がさわがしくなつてきたので、飛び出て見ると三十人くらいの男の人等が、運いつぱいになつているではありませんか。驚いて聞いて見ると、工場長の家移りの加勢だというのです。

工場長ともなれば、大した者だと思いました。

これじや、私達の働き場所もありません。

トラックは何処にあるのですかと尋ねると、上からはいろうとしたが、道がせまくて入らぬので、下に廻りましたが、やはり入りません、と会社員の方がおつしやいました。大型トラックでもどんどん運つているのにおかしいと思つていると、大型も大型、トラック十台もはいるような超特大トラックです。（工場のトラックでしよう）見るのは始めてゞす。

貨車のようなトラック、これでは入りようがありません。そこで荷を解いて持ち運ばねばなりませんでした。

三十米の間を、三十人の人が行列で運ぶ様は、附近の人も目を見張つて見物していました。

これだけの加勢人があるのですから、横付したら仕事がなくて、手ぶらで帰らなくてはならなかつたのに、かえつてよかつたとさゝやく人もいました。

皆楽しそうに運んでいましたが、すぐに済んでしまいました。私達もそれを見ることで終りました。

翌朝、洗濯物を干していると、「お早うございます。」とお隣の御主人の声、私も「お早うございます。昨日はお疲れでしたでしよう。よくねむられましたか。」と下からご挨拶を返えすと、「家内と感謝しているところです。何しろ八幡でも一番空気の悪い紅梅町に住んでいたでしよう。空気のうま味いゝですなあ、静で、ぐつすりねました。この眺め、気持がいゝですなあ！こゝは天国だ。」と、感激しておられました。

又、お宅の庭は野趣があつていゝともおつしやつて、「どこの庭も庭士が造る型は凡そ同じ型、私もお宅のように、ボツボツ自分の手でやりますよ、ブロックは

築かぬことにしました、お宅の庭が見えなくなりますから。」ともおつしやいました。

垣をしないことは、私達にとつても親しく言葉が交わされることをうれしく思いました。

「かきつや、菖蒲の花よろしかつたら株わけして上げますよ。」と私が言いますと、喜んでシャベルを持つて来られたので、堀つて差し上げました。

「まだいろいろの花がありますが、今日は礼拝ですから失礼します。」そう言つて急いで支度し、家を出ると駆足で駅に向いました。

すると、大型高級車が私のゆくてをふさぐようにして止つたので、走られなくて困つて車をよけようとしますと、「お乗りなさい。」見ると、工場長でした。

お蔭様で時刻に充分間に合い、心からお礼申し上げました。

人の親切は、いつまでも心に残ります。

私もそういう人になりたいと思いました。

（四七・五・二四）

「編集後記」

重くたれこめた、どす黒い雲

風雨に、ゆれざわめく四方の木立

降る雨が木の葉をたゝき落さんばかりに打ちつける時

それは、まるでサタンの手に押えつけられ、恐怖のため狂わんばかりに駆け立つている様であつた。

その合間に、小さなテントが三つあつた。

このテントには、子供がいた。

雨はテントを次第に強く激しくたゝいた。

「先生、讃美歌を歌おうよ。」一番小さな男の子が言つた。

〃ここも神の、御国なれば。。。。。〃

歌声は静かに始まつた。

そして大きくなつた。

今まで心の中にあつた恐れ、不安は消え、テントは一の歌声になつた。

讃美は一人一人を喜びに変していつた。

一つのテントに始まつた讃美は、一つ、もう一つと飛

火していつた。
そして、讃美の三輪唱は、押し寄せる波のように、降る雨に逆つて燃える炎となつて、天にとゞけとばかりの勢いであつた。
子供達には、もう恐れも、淋しさもない。
テントに打ちつける風雨さえ忘れてしまつていた。

これは、八月二十四。二十五日の日曜学校キャンプの一コマです。
もう一度、この感激に思いを馳せながら、ぶどうの木第七号の最後の編集をさせて戴きました。
このぶどうの木を主によつて、主にある大濠公園教会。八幡前田教会の皆様方とゝもに、信仰のエベネゼルとなし、あの時の子供達の様に、感謝。讃美の輪を広げ、さらに第八号も多くの原稿が集まりますように祈りながら編集後記といたします。

一九七二年八月三一日

編集
責任者　安東篤良